

2019ジュニアニュース No.3

第3号 (一社)全日本ジュニア体操クラブ連盟

発行日:平成31年3月8日(金)

発行所:東京都中央区日本橋1-16-6 久富ビル4階

Tel:03(3281)7788

「2019ジュニアニュースNo.3」をお届けいたします。

指導者の皆様におかれましてはご確認よろしくお願い申し上げます。

今回の連絡事項は下記のとおりです。

1.(公財)日本体操協会「男子体操競技情報27号」並びに同号
《別刷》について

1.(公財)日本体操協会「男子体操競技情報27号」並びに同号
《別刷》について

(公財)日本体操協会ホームページにおいて「男子体操競技情報27号」と、男子体操競技情報《別刷》が3月2日付けで公開されました。当連盟からもジュニアニュースにて皆さまに情報をお送り致します。

【以下体操協会ホームページより】

((公財)日本体操協会ホームページ:<https://www.jpn-gym.or.jp/artistic/rules/> 内

【男子体操競技情報27号】

<https://www.jpn-gym.or.jp/artistic/wp-content/uploads/sites/2/2019/03/8f39cc03b97814363d30ad601126d7ae.pdf>

【男子体操競技情報《別刷》】

<https://www.jpn-gym.or.jp/artistic/wp-content/uploads/sites/2/2019/03/9a1bd0f1afecdfb54ba61f3a25d1623d.pdf>

※上記に関する追加情報が掲載された場合は、ジュニアニュースでお知らせをするのではなく、連盟ホームページに掲載させて頂く形を取らせて頂きます。ご了承ください。

2019 年 3 月 2 日

男子体操競技情報 27 号

(公財)日本体操協会
東京オリンピック強化本部
審判委員会体操競技男子審判本部

【目次】

1	はじめに	1
2	第 48 回世界体操競技選手権ドーハ大会報告	2
3	2018 年度国内競技大会総括および指標	14
4	2017～2018 年 D スコアランキング	17
5	2017 年版採点規則修正、追加情報	21
6	おわりに	27
※	難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達	別刷 1
	タイ・ブレイク	別刷 24
	2019 年度国内内規	別刷 25

1. はじめに

東京オリンピック男子体操競技強化本部
男子体操競技強化本部長 水鳥 寿思

日本の体操に関わっておられる審判、コーチ、スタッフのみなさまにおかれましては日頃より審判業務、選手強化活動にご尽力いただき誠にありがとうございます。そして、競技力向上を目指した日本選手のたゆまぬ努力に対してこの場を借りて敬意を表します。

昨年開催されました第 48 回世界選手権大会では団体総合 3 位となり、東京 2020 における団体出場権をどの競技よりも早く獲得することができました。しかしながら、ライバルである中国、ロシアには後塵を拝する結果となり、東京 2020 まで残り 1 年半と期日が迫るなか、早急に強化策の立て直しを講じる必要があります。特に、E スコアに対する評価は年々厳しくなっており、難しい技を実施しても正確に美しく表現できなければ高得点には結びつかないように感じます。そのような状況において、ルールを詳細に理解し、それに対応した練習メニューを策定するとともに、着実に遂行していくことが東京 2020 での成功につながる唯一の方法であると言っても過言ではありません。ナショナル強化では、基本トレーニングを重視した練習内容の実施、中国との合同練習の開催など、東京 2020 に向けて新たな取り組みを行っています。

個人枠の戦いではメダル獲得の可能性を図るため世界ランキング制を採用するなど、より一層採点の正確性、妥当性が求められています。採点業務を担当される審判の方々におかれましては、ジャッジズスキルが選手強化と選手選考に大きく影響することを改めてご理解いただき、本資料を熟読し研鑽を積んでいただくことで選手の努力に対する貢献と体操界の発展のためにご尽力賜りますようお願い申し上げます。

2. 第48回世界体操競技選手権ドーハ大会報告

体操競技男子審判本部

本部長 高橋 孝徳

本部員 三富 洋昭

1. 派遣期間：2018年10月18日(木)～11月4日(月)
2. 開催地：カタール ドーハ
3. 会場：Aspire Dome www.aspire.qa
4. 宿泊先：Mövenpick Hotel West Bay Doha
5. 審判員：高橋 孝徳（体操競技男子審判本部本部長）
三富 洋昭（体操競技男子審判本部本部員）
6. 日程：大会スケジュール

10月	19日	(金)	00:01 出国 → ドーハ着 06:00 男子 FIG 技術委員・D 審判会議
	20日	(土)	男子審判会議・抽選 (C I、C II)
	21日	(日)	男子ポディウムトレーニング (1～5 班)
	22日	(月)	男子ポディウムトレーニング (6～10 班)
	23日	(火)	女子ポディウムトレーニング (1～6 班)
	24日	(水)	女子ポディウムトレーニング (7～11 班)
	25日	(木)	開会式 男子予選 (1 班～5 班)
	26日	(金)	男子予選 (6 班～10 班) ※日本 6 班
	27日	(土)	女子予選 (1 班～6 班) ※日本女子 2 班
	28日	(日)	女子予選 (7 班～11 班)
	29日	(月)	男子団体決勝
	30日	(火)	女子団体決勝
	31日	(水)	男子個人総合決勝
11月	1日	(木)	女子個人総合決勝
	2日	(金)	種目別決勝 男子 FX、PH、SR 女子 VT、UB
	3日	(土)	種目別決勝 男子 VT、PB、HB 女子 BB、FX フェアウェルバンケット
	4日	(日)	出国 ドーハ 6:45(QR812)⇒羽田 22:30

7. 参加状況：67 カ国 256 名

1) チーム数 46 ケ国

2) 個人出場 21 カ国

6 種目出場：115 名

ゆ か：200 名

あん馬：202 名

つり輪：194 名

跳 馬：37 名 (2 本実施)

平行棒：189 名

鉄 棒：197 名

8. 審判会議

1) TC メンバー

TC メンバーにより担当種目のプレゼンテーションが行われた。

TC メンバーと担当種目は以下の通りである。その他、10.審判団を参照。

President MICKEVICS Arturs (LAT)			
FX	THOMSON Jeffrey (CAN)	VT	TOMITA Hiroyuki (JPN)
PH	HUANG Liping (CHN)	PB	MARCOS FELIPE Julio (ESP)
SR	TOMBS Andrew (GBR)	HB	ALBRECHT Holger (GER)

2) 審判会議内容

最初に President の MICKEVICS Arturs 氏より挨拶があり、NewsLetter#34 について解説がなされた。次いで種目ごとに担当者からプレゼンテーションが行われた。各種目とも従来からの変更点、および数か所の減点項目の確認や注意点が挙げられ、E スコアの採点練習が実施された。

以下は各種目で取り上げられた減点項目である。

□ ゆ か

1) 静止技の静止時間

- ・十字倒立の肩の高さ、静止時間

2) 宙返り技のひねりについて

- ・ひねり不足の減点は実施された角度不足を明確に
- ・連続技の一つ目の着地姿勢についても減点の対象となる

3) 着地の準備について

- ・準備局面の見られる着地かどうか、余裕のない捌きは実施の状況により 0.1 or 0.3 の減点

4) コントロールされていない着地

- ・止めることなく、次の動作に移行する捌きは減点の対象
- ・良い捌きとして2015年世界選手権グラスゴー大会の萱選手の映像
- ・着地の足の開きは 0.1 or 0.3 の減点

5) 空中での姿勢

- ・2回宙返りでの脚の開きは開き度合いによって 0.1 or 0.3 の減点
- ・前方2回宙返りの減点（つま先の乱れ、脚の開き、着地）
- ・連続技の宙返りの高さ
- ・かかえ込みと伸身姿勢の違いを明確に

6) 着地でのジャンプ正面支持臥

- ・すぐに倒れ込む捌きは 0.5 の減点

□ あん馬

1) 交差系の技

- ・脚の高さ（特に交差倒立の前・後での片足の抜き、入れて低い捌きは 0.1 or 0.3 の減点）

2) 交差倒立系の技

- ・スイングを使うことなく力で垂直に脚が上がる捌きは不認定

3) 姿勢

- ・腰まがりが見られる度に 0.1 の減点
- ・旋回における身体の伸ばし、向き

②姿勢

③倒立位からの角度逸脱

- ・棒下宙返り倒立を例に説明

④手のずらし、握り替え、ステップ

⑤コントロールされているかどうか

⑥ダブルスイング ex)ヒールからスイング倒立、止まらず振り下ろしは 0.3 の減点

2) 宙返り技の捌き

- ・身体の伸ばし、正確な姿勢、コントロールがされているか

3) バブサーでのバーを持つ際の体勢

- ・身体の位置が水平位から外れていたり着手時に肩角度がある実施は減点、46° 以上の逸脱は不認定

4) シャルロタイプ

- ・単棒倒立での静止を明確に見せること
- ・両手の握り位置が離れないこと

5) モイや車輪倒立系での膝のまがり

- ・水平より上からの膝まがりの場合は 0.1、倒立位からの場合は 0.3 の減点

6) 前方宙返り開脚抜き（腕）支持で脚がバーの外を通っていない場合は B 難度となり無価値な開脚として 0.3 の減点

7) 前振り上がり：腰の位置が低い捌きは相応の減点

- ・前振り上がり脚前挙支持は 0.1 or 0.3 の減点

8) 静止技の静止時間

- ・脚前挙支持や力倒立などの静止技は 2 秒静止しなければ 0.3 の減点

9) 終末技

- ・高さ、着地準備、着地

□ 鉄 棒

1) 倒立位からの外れの減点（ルール通り）

2) ひねりを伴う技での倒立位からの外れの減点（ルール通り）

3) 腕のまがり

- ・手放し技の前後やその後の車輪での腕まがりも相応の減点

4) 膝のまがり

- ・手放し技や終末技の前の車輪での膝まがりは 0.1 or 0.3 の減点

5) クースト

- ・ひねり不足、高さ、角度逸脱

※内村選手の映像は減点なしで紹介

6) 終末技

「後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り」での姿勢

腰まがりが、手を放した瞬間、経過中、着地前または全経過でまがっている実施への減点

9. 新技申請

本大会では新技申請は提出されなかった。

10. 審判団

◆ 参加審判

67 カ国 105 名

D 審判：12 カ国 12 名 R 審判：12 カ国 12 名 E 審判：43 カ国 85 名

1 カ国複数名派遣国：38 カ国

◆ D 審判団

FX	D1 : TOTH Josef (AUT)	D2 : HANLEY Nicola (GBR)
PH	D1 : CARRILES Pablo (ESP)	D2 : GIORGADZE Ilia (GEO)
SR	D1 : SEBASTIAO Pedro (POR)	D2 : ANDREEV Dmitrii (RUS)
VT	D1 : ALIYEV Rza (AZE)	D2 : BACHMAN Daniel (USA)
PB	D1 : HADJI Mohammed Smail (ALG)	D2 : THINGVOLD Tom (NOR)
HB	D1 : REIMERING Vincent (NED)	D2 : RUPCIK Lubos (SVK)

◆ 抽選結果

○予選 ゆ か E5 三富洋昭

○個人総合決勝 跳 馬 E4 高橋孝徳

○種目別決勝 あん馬 E1 高橋孝徳

11. 結 果；

□ 日本選手予選結果

個人総合	白井 健三	83.864	6 位 予選通過
	萱 和磨	82.915	10 位 予選通過
ゆ か	白井 健三	14.833	2 位 予選通過
	萱 和磨	14.333	8 位 予選通過
	谷川 航	14.033	26 位
	田中 佑典	13.766	43 位
あん馬	白井 健三	12.966	20 位
	内村 航平	12.966	21 位
	萱 和磨	12.425	41 位
	谷川 航	11.000	116 位
つり輪	谷川 航	14.000	23 位
	萱 和磨	13.966	24 位
	内村 航平	13.900	28 位
	白井 健三	13.733	39 位
跳 馬	白井 健三	14.566	7 位 予選通過
	谷川 航	14.466	11 位
平行棒	田中 佑典	14.833	12 位
	谷川 航	14.800	13 位
	萱 和磨	14.691	18 位
	白井 健三	14.466	25 位
鉄 棒	内村 航平	14.600	1 位 予選通過
	田中 佑典	14.133	10 位
	萱 和磨	13.300	45 位
	白井 健三	13.133	55 位

□ 団体総合予選

Rk.	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	RUS	43.533	40.966	43.033	43.765	45.040	42.065	258.402
2	CHN	41.566	40.940	42.232	44.299	46.066	42.733	257.836
3	日本	43.199	38.357	41.866	43.533	44.324	42.033	253.312
4	USA	42.699	38.833	41.466	43.199	43.233	40.932	250.362
5	GBR	42.415	40.599	41.400	43.432	42.891	39.099	249.836
6	BRA	40.765	36.966	42.299	43.333	42.332	41.266	246.961
7	NED	41.500	37.533	40.233	42.332	42.632	41.433	245.663
8	SUI	41.865	39.099	40.133	41.824	41.599	40.666	245.186

□ 団体総合決勝

Rk.	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	CHN	40.798 (7)	41.898 (1)	42.873 (3)	44.432 (2)	46.133 (1)	40.500 (7)	256.634
2	RUS	43.199 (1)	40.465 (5)	43.691 (1)	44.565 (1)	43.266 (2)	41.399 (5)	256.585
3	日本	42.099 (4)	41.733 (2)	42.549 (4)	44.132 (3)	40.632 (7)	42.599 (1)	253.744
4	USA	42.966 (2)	40.632 (3)	41.465 (6)	43.732 (5)	41.699 (4)	41.500 (3)	251.994
5	GBR	42.599 (3)	40.499 (4)	41.766 (5)	43.900 (4)	40.799 (6)	39.065 (8)	248.628
6	SUI	41.299 (6)	37.132 (7)	41.065 (7)	41.399 (8)	42.266 (3)	41.133 (6)	244.294
7	BRA	41.932 (5)	35.899 (8)	42.899 (2)	42.057 (7)	39.674 (8)	41.533 (2)	243.994
8	NED	38.432 (8)	38.066 (6)	38.898 (8)	42.466 (6)	41.299 (5)	41.499 (4)	240.660

□ 個人総合予選

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	XIAO Ruoteng	CHN	14.200	14.633	14.133	14.933	15.000	14.433	87.332
2	NAGORNY Nikita	RUS	14.800	14.000	14.633	14.733	14.966	13.966	87.098
3	MIKULAK Samuel	USA	14.333	14.133	14.200	14.333	15.033	14.566	86.598
4	DALALOYAN Artur	RUS	14.833	11.766	14.100	14.666	15.041	14.166	84.572
5	SUN Wei	CHN	13.200	13.441	13.933	14.700	14.733	14.000	84.007
6	白井 健三	日本	14.833	12.966	13.733	14.733	14.466	13.133	83.864
7	LIN Chaopan	CHN	12.933	12.866	13.833	14.600	15.266	13.966	83.464
8	BELYAVSKIY David	RUS	12.500	14.000	13.533	14.333	15.033	13.933	83.332

□ 個人総合決勝

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	DALALOYAN Artur	RUS	14.800	13.400	14.533	15.133	15.566	14.166	87.598
2	XIAO Ruoteng	CHN	14.133	14.700	14.333	14.866	15.333	14.233	87.598
3	NAGORNYI Nikita	RUS	14.733	13.566	14.500	14.766	14.866	13.900	86.331
4	SUN Wei	CHN	13.633	14.766	13.900	14.533	14.800	14.266	85.898
5	MIKULAK Samuel	USA	14.400	14.300	14.166	14.600	15.441	12.366	85.273
6	萱 和磨	日本	13.800	14.100	14.000	14.366	14.766	13.733	84.765
7	白井 健三	日本	14.900	12.533	13.666	15.166	14.266	14.000	84.531
8	HALL James	GBR	14.100	13.666	14.066	14.366	14.500	13.600	84.298

□ 日本選手種目別決勝戦績

ゆ か	白井 健三	14.866	2 位	銀メダル
	萱 和磨	14.100	8 位	
跳 馬	白井 健三	14.675	3 位	銅メダル
鉄 棒	内村 航平	14.800	2 位	銀メダル

12. 所 感

2 日間のボディウムトレーニングは、予選競技と同じ時間帯のローテーションで行われた。今大会は中国の TaiShan 製の器具が使用されたが、ゆかフロアーのバネが硬く蹴りが合わない、あん馬の表面が固くすべりやすいなどの指摘が各国から相次いだ。しかしながら使用される器具に合わせて大会に臨んできたチームもあり、その準備が大きく結果にも影響したと考える。

日本チームは、器具との調整に時間を要したが、現状において最大限の点数を獲得できる可能性がある演技構成に切り替えて臨み、銅メダルを獲得した。満足できる結果ではないが、東京五輪の出場権を獲得し、最低限の目標はクリアできた。

団体総合決勝は、日本はあん馬からのスタートとなり、一番手の内村選手が良い滑り出しを見せてくれた。次いで萱選手、谷川選手と順調につなぎ、好スタートを切った。2 種目目のつり輪、3 種目目の跳馬と好調が続いていたが 4 種目目の平行棒、最終種目のゆかで大過失がありミスに相当する 2 点を失った。予選では、中国とロシアの点数差は近似しており、日本とは 5 点差で上位に位置していた。上位入賞のためには日本は一つもミスが許されない状況のなか、中国やロシアは一つ二つのミスは許容される余裕さが感じられた。優勝した中国、第 2 位のロシアとの点数差は 0.049 の僅差であった。

個人総合予選では、足のけがの影響でゆかと跳馬を辞退した内村選手に代わり萱選手が全種目に出場し、白井選手（予選 6 位）と萱選手（予選 10 位）が決勝に進んだ。決勝において白井選手は、蹴りが合わないゆかでは演技構成を変えて演技に臨んだが、E スコアが伸びず予定していた得点には及ばなかった。また、あん馬と平行棒でミスが出てしまい 7 位となった。萱選手は、大きなミスなく 6 種目をやり終えたが全体的に得点が伸びず 6 位となり、日本としてメダルを獲得することはできなかった。個人総合としては 23 年ぶりのメダルなしの結果で終わった。

一方、中国、ロシアは勢いがあり力をつけてきていると強く感じた。昨年のモントリオール大会では上位に名前の挙がっていなかった DALALOYAN Artur 選手（RUS）が 1 位、2 位に XIAO Ruoteng 選手（CHN）、3 位に NAGORNYI Nikita 選手（RUS）と上位 3 位はロシア、中国勢が占めた。また 4 位に中国、5 位にアメリカが入り個人総合ではアメリカ勢も注視する必要性を感じた。

上位 8 名の D スコア（表 1）では、NAGORNYI Nikita 選手（RUS）が 36.10 と唯一 36 点台の高いスコアをマークしており、昨年より D スコアを上げてきている。上位の得点から推察すると今後は 36 点台の D スコアを構成することが、メダル争いには必要であると予想される。

（表 1）個人総合決勝進出者上位 8 名 D スコア

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	個人総合
1	NAGORNYI Nikita	RUS	6.40	5.90	6.00	5.60	6.40	5.80	36.10	3
2	XIAO Ruoteng	CHN	6.10	6.10	5.70	5.60	6.20	6.00	35.70	2
3	SHIRAI Kenzo	JPN	6.80	5.40	5.70	5.60	6.20	5.80	35.50	7
4	DALALOYAN Artur	RUS	6.20	5.50	5.90	5.60	6.40	5.70	35.30	1
5	SUN Wei	CHN	5.50	6.30	5.90	5.60	5.70	6.00	35.00	4
6	KAYA Kazuma	JPN	5.70	6.00	6.10	5.20	6.30	5.70	35.00	6
7	HALL James	GBR	5.90	6.10	5.80	5.20	6.00	5.80	34.80	8
8	MIKULAK Samuel	USA	5.70	6.00	5.60	5.20	6.40	5.70	34.60	5

E スコアは減点項目に則り厳密に採点される傾向は変わらず、ルール通りの機械的な採点は昨年と同様であったが、ZOU Jingyuan 選手（CHN）の平行棒など素晴らしい実施においては 9 点台中盤の高い評価がされていた。

個人総合決勝での上位 8 名の E スコアを高い順に並べると表 2 のようになり、E スコアにおいてもロシア、中国勢が上位を占める結果となっている。

昨年と比較し、D スコア、E スコアともにロシア勢が上位に 2 人ランクインしていることから若手が順調に力をつけてきていることが伺える。

昨年上位に入っていた Belyavskiy David 選手（RUS）は、予選においてゆかとあん馬で大きなミスをしているため、個人総合には出場していないが、予選での E スコアトータルは 48.734 点と上位に迫っている。

上位 8 名の E スコア（表 2）では、5 名の選手に 7 点台、1 名に 6 点台のスコアがみられた。いずれかの種目において、演技が安定しなかった、または弱点種目のあることが伺える。今後メダル争いや上位に入るためには、D スコアを向上させるとともに、弱点種目を克服し、E スコアを高めることが急務の課題となるであろう。

（表 2）個人総合決勝進出者上位 8 名 E スコア

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	個人総合
1	DALALOYAN Artur	RUS	8.600	7.900	8.633	9.533	9.166	8.466	52.298	1
2	XIAO Ruoteng	CHN	8.033	8.600	8.633	9.266	9.133	8.233	51.898	2
3	SUN Wei	CHN	8.133	8.466	8.000	9.033	9.100	8.266	50.998	4
4	MIKULAK Samuel	USA	8.700	8.300	8.566	9.400	9.041	6.666	50.673	5
5	NAGORNYI Nikita	RUS	8.333	7.666	8.500	9.166	8.466	8.100	50.231	3
6	KAYA Kazuma	JPN	8.100	8.100	7.900	9.166	8.466	8.033	49.765	6
7	HALL James	GBR	8.200	7.566	8.266	9.166	8.500	7.800	49.498	8
8	SHIRAI Kenzo	JPN	8.100	7.133	7.966	9.566	8.066	8.200	49.031	7

種目別決勝においては、内村選手が鉄棒で銀メダル、白井選手がゆかで銀、跳馬で銅メダルを獲得した。

萱選手がゆかで決勝に進出し 8 位であった。ほかの日本選手も果敢に攻めた演技を披露してくれたが、決勝進出には至らなかった。

ゆかでは、白井選手が器具のバネに対応できず、本来の D スコアを下げた構成で演技に臨んだが、E スコアが伸びず 1 位の DALALOYAN Artur 選手 (RUS) に僅差で 2 位という結果であった。一方、アメリカの MOLDAUER Yul 選手は、丁寧な着地の捌きを行い 8.766 と高い E スコアを獲得していた。ゆかにおいては、ミスのない演技でしっかりと着地を止めたことを示した捌きに高い E スコアが出ていた。

あん馬は、LEE Chih Kai 選手 (TPE) が開脚旋回をメインに組み入れた演技構成をスピード感のある実施で披露し、E スコアの最高となる 8.666 を獲得した。XIAO Ruoteng 選手 (CHN) が WHITLOCK Max 選手 (GBR) と 15.166 点で同点であったが E スコアが高いため 1 位となった。

逆交差倒立 (D) の倒立に持ち込む際の脚の振りが見られない捌きについては、厳しくチェックされ、予選では不認定となるケースも散見された。判断基準のひとつとして、スイングした両脚が馬体よりも振りあがること、下半身が上半身に近づくように脚が戻り、下がる動きがないこと、捌きのほとんどを力の使用による実施とならないことが条件である。

つり輪の決勝出場者は団体総合や個人総合上位国からは少なく、つり輪に特化したスペシャリストが多く進出している。優勝した PETROUNIAS Eleftherios 選手 (GRE) の E スコアは 9.066 であり、力技の捌きはより力強く、洗練された実施であった。上位選手は D スコアが近似しており E スコアに関しても 1 位から 6 位までの選手が 8.6 台から 9.0 台までの 0.4 の僅差の中に位置していた。今後は更に細かい部分での捌き方や表現などが、序列に影響してくると予想される。静止時間や角度など一定の評価ラインの領域に達していない演技実施はさらに厳しい採点になることが考えられる。

跳馬は、1 位の RI Se Gwang 選手 (PRK) が唯一 6.0 の跳越技を 2 本実施した。E スコアは 2 本とも 8.933 と 9 点台には及ばなかったが D スコアの高さにより優勝した。白井選手は、2 本目 5.2 の跳越技であったが、着地を決め E スコアで 9.40 の最高点をマークし、銅メダルを獲得した。他の選手と比較し高い腰の位置での着地は的確に評価されていた。

跳馬においては第 2 局面の雄大さとともに高い腰の位置でしっかりと着地を止めにいくことが重要である。第 1 局面の脚の開きに関しては厳密に減点がなされていた。

平行棒は、ZOU Jingyuan 選手 (CHN) が D スコアを予選 6.6 から 7.0 に引き上げ、更に E スコアでも途中若干バランスをくずしながらも 9.433 をマークし、決定点 16.433 と 2 位以下を大きく引き離し優勝した。手のずらしがなく、雄大さと高い安定感で見守る者を魅了する素晴らしい演技であった。

終末技は、前方 2 回宙返り系の技を実施する選手が増えたが、空中での脚開き、着地でのゆがみや姿勢など、厳しく採点される傾向となってきた。昨年以上に洗練された捌きが要求されていた。

鉄棒は、ZONDERLAND Epke 選手 (NED) が D スコア 6.8、E スコア 8.30 で優勝した。E スコアの最高点は MIKULAK Samuel 選手 (USA) の 8.433 点であり、依然として E スコアが伸びない種目であった。内村選手は素晴らしい実施で着地を決めるも E スコアの 8.40 に会場内も不満のどよめきが広がった。1 位には及ばなかったが銀メダルを獲得した。内村選手の実施をもってしても E スコアが 8.40 という結果を受け止め、実施と減点個所の詳細な分析を進める必要がある。鉄棒全般にひねり系の技での角度の減点に加え、手放し技実施後の処理や姿勢欠点、終末技での空中姿勢や着地など、まだまだ改善されるべき箇所があると感じた。

2017 年版ルールが適用されて 2 年目となり、技の認定、減点の度合いはどの程度の基準なのかを注視して大会に臨んだ。技の認定に関しては条件が付随されたもの以外では、特に大きな変更はない印象であったが、ゆかの前方宙返りの判定、あん馬の逆交差倒立の判定がより厳密になされて

いた。

E スコアについては減点項目が厳密に適用され、正確な実施からの逸脱は技の難易度に関係なく減点されていた。ルールに忠実かつ美しさ、雄大さまたは力強さが表現された実施が評価されていた印象であった。

今大会では中国、ロシアが存在感を示し、ルールに準じた選手強化が順調に進んでいることをアピールする結果となった。特にロシアは昨年からさらに力をつけ進化したとを感じる。団体決勝では、1 位中国と 2 位ロシアとの点数差は 0.1 未満の僅かな差で金メダルを争った。日本はその後を 2.841 点と大きな差をあけられ後塵を拝する結果となった。適切な強化策を講じなければ中国、ロシアとの差は縮まらず、2020 年東京五輪での金メダル争いからも脱落しかねない危機感を感じた。今回の結果を真摯に受けとめ、大きな課題を得たととらえるならば、今後の強化策、戦略を講じるうえでは貴重な経験であったと考えられる。東京五輪に向けた世界へのアピールのためには 2019 年世界選手権シュツットガルト大会での躍進が重要である。今回得た課題を一つ一つクリアできるような強化策を練り直し、新たな戦術を講じてこれからの大会での活躍を強く願いたい。

◇ メダル獲得数

◇国別メダル獲得数

		1 位	2 位	3 位	合計
1	RUS	2	2	2	6
2	CHN	3	1		4
3	JPN		2	2	4
4	GRE	1			1
5	PRK	1			1
6	NED	1			1
7	GBR		1		1
8	BRA		1		1
9	UKR		1		1
10	PHI			1	1
11	TPE			1	1
12	ITA			1	1
13	USA			1	1

◇種目別メダル獲得国

	1 位	2 位	3 位
団体総合	CHN	RUS	日本
個人総合	RUS	CHN	RUS
ゆ か	RUS	日本	PHI
あん馬	CHN	GBR	TPE
つり輪	GRE	BRA	ITA
跳 馬	PRK	RUS	日本
平行棒	CHN	UKR	RUS
鉄 棒	NED	日本	USA

13. 種目別上位者の演技構成

◆ ゆ か

1. DALALOYAN Artur (RUS) 14.900 D6.20 E8.700

前方伸身宙返り 1 回ひねり～前方伸身宙返り 5/2 ひねり(C+E)、前方伸身宙返り～前方屈身 2 回宙返り(B+E)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり～前方伸身宙返り 2 回ひねり(D+D)、後方伸身宙返り 3/2 ひねり～前方伸身宙返り 3/2 ひねり(C、C)、開脚座から伸腕屈身力十字倒立(C)、後方伸身宙返り 3 回ひねり(D)

2. 白井 健三 (JPN) 14.866 D6.80 E8.066

後方かかえ込み 2 回宙返り 3 回ひねり (G)、前方かかえ込み宙返り 1 回ひねり～前方伸身宙返り 3 回ひねり(B+F)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり～前方伸身宙返り 5/2 ひねり(D+E)、後方伸身宙返り 4 回ひねり(F)、倒立から伸膝前転脚前挙支持経過開脚倒立 (C)、後方伸身宙返り 7/2 ひねり～前方伸身宙返り 1 回ひねり(E+C)、後方伸身宙返り 3 回ひねり(D)

3. YULO Carlos Edriel (PHI) 14.600 D6.20 E8.400

前方屈身 2 回宙返りひねり(F)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり～前方伸身宙返り 5/2 ひねり(D+E)、
後方伸身宙返り 7/2 ひねり～前方伸身宙返りひねり(E+B)、後方伸身宙返り 2 回ひねり(C)、開
脚座から伸腕屈身力十字倒立(C)、前方伸身宙返り 1 回ひねり～前方伸身宙返り 2 回ひねり
(C+D)、後方伸身宙返り 3 回ひねり(D)

◆ あん馬

1. XIAO Ruoteng (CHN) 15.166 D6.60 E8.566

馬端縦向き旋回 1 回ひねり(D)、トンフェイ(D)、開脚旋回 3/3 前移動(E)、開脚旋回 3/3 後ろ移
動(E)、E フロップ(E)、ブスナリ(F)、逆交差倒立(D)、D コンバイン(D)、ロシアン 1080° 転向
(D)、ループ倒立 450° ひねり 3/3 部分移動下り(E)

2. WHITLOCK Max (GBR) 15.166 D6.800 E8.366

逆交差倒立(D)、E コンバイン(E)、E フロップ(E)、ブスナリ(F)、馬端縦向き旋回 1 回ひねり
(D)、開脚旋回 3/3 前移動(E)、開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動 1 回ひねり(E)、ウ・グォニアン(E)、
ロシアン 1080° 転向(D)、ループ倒立 450° ひねり 3/3 部分移動下り(E)

3. LEE Chih Kai (TPE) 14.966 D6.30 E8.666

逆交差倒立(D)、下向き逆移動倒立 3/3 部分移動、下ろして開脚旋回(E)、両手を挟んで旋回
1 回ひねり(F)、両手を挟んで横向き旋回(B)、横向き旋回 1 回ひねり移動(E)、横向き旋回 1
回ひねり(D)、1 回の旋回で正面横移動(C)、開脚旋回 3/3 前移動(E)、開脚旋回 3/3 後ろ移動(E)、
下向き逆移動倒立 3/3 部分移動下り(D)

◆ つり輪

1. PETROUNIAS Eleftherios (GRE) 15.366 D6.30 E9.066

ヤン・ミンヨン(E)、ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、後ろ振り上がり中水平
支持(E)、後方車輪倒立(C)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ナカヤマ(D)、輪の高さで前方宙返り
直接十字懸垂(D)、ジョナサン(D)、前方車輪倒立(C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり下
り(E)

2. ZANETTI Arthur (BRA) 15.100 D6.20 E8.900

ヤン・ミンヨン(E)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり中水平支持
(F)、ジョナサン(D)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ナカヤマ(D)、輪の高さで前方宙返り直接
十字懸垂(D)、ほん転逆上がり倒立(C)、前方車輪倒立(C)、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り
(D)

3. LODADIO Marco (ITA) 14.900 D6.30 E8.600

バランディン 3 (E)、ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、後ろ振り上がり中水平
支持(E)、ヤマワキ(C)、ジョナサン(D)、輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂(D)、後ろ振り上
がり水平支持(D)、アザリアン(D)、後ろ振り上がり倒立(C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひ
ねり下り(E)

◆ 跳 馬

1. RI Se Gwang (PRK) 14.933

1 本目：リ・セグウアン 2	14.933	D6.00	E8.933
2 本目：リ・セグウアン	14.933	D6.00	E8.933

2. DALALOYAN Artur (RUS) 14.883

1 本目：シライ／キム・ヒフン	14.866	D5.60	E9.266
2 本目：ブラニク	14.900	D5.60	E9.300

3. 白井 健三(JPN) 14.675

1 本目：シライ／キム・ヒフン	14.750	D5.60	E9.150
2 本目：ドリッグス	14.600	D5.20	E9.400

◆ 平行棒

1. ZOU Jingyuan (CHN) 16.433 D7.00 E9.433

ソラキディス(G)、マクーツ(E)、リチャード (E)、棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、前方宙返り開脚抜き直接懸垂(E)、バブサー (E)、ティップルト(D)、ヒーリー(D)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

2. VERNIAIEV Oleg (UKR) 15.591 D6.70 E8.891

後振り上がり前方宙返り支持(D)、棒下宙返りひねり倒立(E)、シャルロ(E)、単棒倒立からヒーリー(E)、マクーツ(E)、ティップルト(D)、バブサー (E)、ヒーリー(D)、ピーターズ(D)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

3. DALALOYAN Artur (RUS) 15.366 D6.40 E8.966

横向き逆上がり倒立 1/4 ひねり倒立(D)、リチャード (E)、前振り上がりひねり倒立(E)、ティップルト(D)、バブサー(E)、前方宙返り開脚抜き腕支持(D)、ヒーリー(D)、後振り上がり前方宙返り支持(D)、前振りひねり倒立(C)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り(F)

◆ 鉄 棒

1. ZONDERLAND Epke (NED) 15.100 D6.80 E8.300

エンドー1 回ひねり大逆手(D)、カッシーナ～コバチ(G+D)、コールマン～ゲイロード 2(E+E)、アドラー1 回ひねり逆手倒立(E)、アドラーひねり倒立(D)、シュタルダー(B)、クースト(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

2. 内村 航平 (JPN) 14.800 D6.40 E8.400

屈身コバチ(E)、カッシーナ(G)、コールマン(E)、シュタルダー 3/2 ひねり片大逆手(D)、アドラー1 回ひねり逆手倒立(E)、ヤマワキ(D)、エンドー(B)、アドラーひねり倒立(D)、クースト(C)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

3. MIKULAK Samuel (USA) 14.533 D6.1 E8.433

カッシーナ(G)、コールマン(E)、伸身トカチェフ(D)、トカチェフ～リンチ(C+D)、ツォ・リミン(C)、アドラーひねり倒立(D)、クースト(C)、シュタルダー(B)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り(E)

3. 2018 年国内競技会総括および指標

1) 全日本個人総合・種目別・団体選手権、NHK 杯、他一般規則適用競技会

□ ゆか

ゆかの D スコアでは、6.0 が分厚い壁となっており、上位選手の演技はほとんどが 5 点台中盤から 6 点の範囲に集中していた。E スコアでは、着地が多い種目のため、高得点の出づらいい種目の一つになっており、得点分布は 8 点を少し上回るレンジに集中する傾向であった。着地の「一步」の解釈がより厳しく評価されることになった上に、ひねり不足や姿勢の乱れ等、他の減点項目も厳密に採点された結果であろう。高得点を得るためには、高い実施レベルでの精度が要求される状況である。個々の技としては「開脚旋回 270° 以上ひねり直接倒立、下ろして旋回」の認定に関して問題提起がなされた。開脚旋回を回してから技に入ろうとする際、旋回の抜きの部分で既にひねりの動作が見られると、「旋回 2 周以内」の条件に抵触し、分割や不認定となる恐れも生じるので注意して欲しい。

今後の方針については、まずは引き続き着地が止まる演技を評価するが、特に止まった場合は確実に踵を閉じて減点を帳消しにする捌きを求めたい。また跳馬と同様に上半身が起き上がった腰高で安定した着地も期待する。宙返り系の技では、ひねり不足による斜め向きの着地から次の宙返りへつなぐ実施は、減点項目として注意喚起されている状況である。また、姿勢によって難度の異なる技は、意図を明確にして実施する必要がある。腰や膝のまがりによって意図が不明瞭な実施では、不本意な判定となる恐れがある上、曖昧な姿勢として減点の対象である。D スコアの上がる可能性を模索しつつ、精度を高めた実施となるよう、今後のトレーニングを計画して欲しい。

□ あん馬

得点の分布を見ると D スコア 6.0 以上を揃えることが難しく、E スコアも 8 点半ばで頭打ちになってしまった。

ドーハの世界選手権では交差倒立の判定基準が明確化されたため、腰のまげ過ぎや力を使った実施についてはより厳しく採点されることになった。不認定とされないためにも振動を使った正しい捌きを期待する。

フロップおよびコンバインでは各自の旋回から姿勢がずれたり、足先が上下したりすると 1 周毎に減点されてしまうため、できるだけ体が伸びて安定した実施が求められる。

ウ・グォニアン、ロス、トンフェイ等の移動技では転向中の姿勢はもちろんのこと、終末局面の旋回に入る場面でリズムを崩さないことに注意が必要となってくる。

マジヤールおよびシバドの角度逸脱に関しては機械的に減点されてしまうので、縦向き旋回を習得する段階から向きを意識する必要がある。また開脚での実施もかなり多くなってきているが、閉脚同様に角度はチェックされるので、特に後ろ移動の体の向きについては減点されないように対処していく必要がある。

□ つり輪

上位選手においては D スコア 5.7~6.1 の範囲に大多数の選手が分布し、E スコアの獲得に関心が高かったと思われる。高難度の力技に挑戦すべきシーズンであったのではないかと考えられたが、実施減点が厳しいとなれば、新たな技への挑戦は難しい状況になってしまったと考えられる。また、輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂や、振り上がり開脚水平支持、十字倒立に関しては、減点をされない実施が難しいようで、構成に入れない演技が多くなったように見受けられる。減点されないように技を減らすのではなく、高難度技を減点なく捌けるようなトレーニングへの取り組みと挑戦を期待したい。

E スコアに関しては、静止時間や技のつなぎ部分の肘まがりの改善、着地を止める取り組みに関しては一定の成果が見られたように思う。今後もさらに力強い捌き、姿勢まで意識して「止めた」印象の着地に期待したい。力（静止）技に関しては、中水平支持の肩の高さや体の「反り」、ナカヤ

マヤアザリアンへの持ち込みの際の早すぎる動作、および反動のような捌きが気になるケースが多かった。また、逆懸垂での静止時間対策として、「体を伸ばした逆懸垂で1秒強～ゆっくり下ろして～体をたたんだ逆懸垂で1秒強」のような実施が散見された。無価値な動きの連続と判断される可能性が高い。

現状から D および E スコアアップのためには、正しい技術や正しい姿勢への妥協のない継続的なトレーニングを、日本全体として取り組んでいく必要があると思われる。それだけのことができる時間がまだ残されている。

□ 跳馬

今年度は「雄大な跳越の実施」と、「腰高で安定した着地」を評価するといった指針をもとに採点をおこなった。年間を通して、ロペスやヨー2などといった D スコア 5.6 の実施が例年に比べて増えてきており、安定した実施も多くみられるようになった。また、リ・セグエンやブラニク、ロペスひねりなどといった希少価値の高い跳越技の実施が見られるなど、技のレパートリーが全体を通して増えてきたように感じた。実施面においては高さ不足や姿勢欠点、着地の準備不足などといった減点がまだ多く見られた。また、カサマツ系の跳越技において、第一局面で側方倒立姿勢を見せず、手を前後にずらしただけの跳越を前方系と判定し、種目別競技会において「一本目と同一グループの跳越技の実施」として ND2.0 の減点が伴ったケースがあった。

□ 平行棒

倒立位での手ずらしを行う演技は以前より減少したことは評価できる。棒下宙返り倒立においては、肘の緩みやまがり、倒立位からの若干の角度逸脱、倒立の姿勢不良など改善が望まれる。特に倒立を終末局面とする技は、倒立の姿勢において、肩角度のあるもの、身体の反りなどの姿勢不良が見られる倒立も多く、今後は一直線になったまっすぐの倒立を意識した改善が望まれる。正しい姿勢で安定した美しい倒立を基盤とした洗練された実施を心掛けていただきたい。また、多くの選手がティップルトを実施しているが、切り返し直後の開脚の支持局面で、一瞬足先が僅かに下がる実施が散見された。終末技に関しては D スコアを高めるため、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り (F) を実施する選手が増えてきたことは評価できるが、脚を閉じて実施する選手は少なく、殆どの実施において脚が肩幅程度に開く演技が目立ち、それに加えてつま先が伸びていない実施も見られた。同じ技を海外のトップ選手は脚を閉じ、着地の準備局面も見せる実施を行っている。彼らと勝負するためには、早急に解決すべき課題であろう。

□ 鉄棒

本年度においても E スコアが伸び悩む傾向は変わらず、振動倒立（経過）技においては、水平位までは難度は認定されるものの、角度減点は中欠点または大欠点を伴う実施が多く見られた。ひねって（片）大逆手になる技を多用することによって、角度減点がかさむこととなり、E スコアが伸びない傾向であった。しかし、それを回避するために手放し技を多用する演技も多くなってきたように感じた。手放し技については組合せ加点を得るより高難度の手放し技を単独で多用する方が落下のリスクが少ないためか、連続して行う選手は少数であった。ブレットシュナイダー (H) やミヤチ (I) などの高難度の手放し技を全国高校総体、国体等で高校生も挑戦する選手が出てきたことは喜ばしいことである。

後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂 (C) ～順手背面車輪 (D) ～順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立 (C) を演技構成に取り入れる選手が増えた。しかし実施においては技能と柔軟性で捌きの格差がみられ、今後その捌きの差異を明確に判定していく必要がある。

終末技の前にクーストを実施する選手が多くいるが、難度を満たすだけのために取り入れているようにも感じる。演技を構成する技の一つとして角度減点がなく、かつ全体のリズムを失うことなく実施することが望まれる。

手放し技や終末技の前の車輪の抜きでは膝まがりが目立ち、美しさに欠ける演技も散見された。技術、姿勢の両面から再確認して欲しい。

終末技は後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D)、または 2 回ひねり下り (E) が大半で、特に後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下りでは経過中に腰まがりが目立つ実施が多かった。

最後にワイヤーにかける張力計を使用する選手・所属が昨年度から増え、競技前アップ時間をオーバーしてしまうことがたびたびあった。コーチは所属を超えて協力し合い素早く行おうとする努力は見られたが、対策の必要性を感じた。

2) ジュニアルール (U-12、U-15) 適用大会総括および指標

平成最後となる第 49 回全国中学校体操競技選手権大会 (島根) は 2017 年制定・2018 年中学校男子適用規則 (U-15) を採用した最初の大会となった。これは中体連が長年に渡り採用してきた規定演技を廃止し、また自由演技を 10 点満点の採点から一般ルールの D・E 制に変更するなど新たな試みへの第一歩を踏み出した大会ともなった。

新しい規則を適用する趣旨は小学生 (U-12) から中学生 (U-15)、高校生 (ジュニア 2 部、高校適用) そして一般規則に至るまで一貫性のある、段階的な指導ならびに評価ができることを意図している。また「みる」「しる」という観点からは、東京 2020 に向けて初心者からオリンピック選手まで同一の採点様式で評価が行われ、体操競技の理解と普及を目指すことができる。

競技会においては、a 難度 (スモール a) を取り入れることで初心者が中体連の大会に出場しやすくなったという声が聞かれ、「普及」という観点からは都道府県単位の大会では良い傾向が伺えた。しかしながら上位者においては全種目に共通して高難度技に傾斜した (D スコア重視) 演技が多い傾向がみられ、実施 (E スコア) に関しては「拙劣な」演技が多かった。規定演技を実施しないことで、指導者や選手の「技の美しさ」や「基本技の習熟」に対する意識が薄れ、「D スコア重視」という意識が先行するようになったら、将来の日本に「美しい体操」は存在しなくなる。そのような危機感を感じる大会でもあった。また、郡や市などの地区大会や都道府県、ブロック大会における実施の評価基準 (E スコア) は、昨年度までの傾向が強く残っており、D と E に分割した意図が十分反映されない傾向も見られた。E スコアの評価基準を前規則の尺度から新しいものへと切り替えることをお願いしたい。「減点がないだけでなく、極限を求めた捌きを評価していく」採点指針であることを理解していただきたい。

U-12 においても、10 点満点の採点から D・E 採点へと踏み出したが、U-15 に比較して、より E スコアの問題点が浮き彫りになったように感じられた。成長過程のクラスであることは明らかであるが、未完成のままの技を羅列した演技が多く、全国大会であるにも関わらず一つ一つの動きに対する美しさへの意識が低い印象を受けた。体や脚のライン、倒立の美しさや完成度は、その後の競技者レベルや表現の芸術性に関わる重要な基本技能であり、習得後の修正が難しい部分でもあるので、強いこだわりを持って作り上げていってもらいたい。

ジュニア期において美しさに対する意識を高く持ち、それを表現できる技能を獲得していかなければ、2024 年、およびそれ以降と続くオリンピックでは中国やアメリカ、ロシアの後塵を拝することになりかねない。選手やコーチの方々には今一度、美しさを表現する原点に戻り「どの角度から誰が見ても美しい体操」を目指してトレーニングを継続していただきたい。審判の方々も正確で妥当な評価が下せるように情報収集と審判技能の向上を図っていただきたい。「理想像」と対決した規定演技の評価を念頭においた採点が求められる。

4. 2017 年～2018 年 D スコアランキング

2017 年から 2018 年までの国際大会、国内大会の個人総合や NHK 杯を対象に各種目の D スコアランキングを掲載する。

対象大会は世界選手権、ワールドカップシリーズ、チャレンジカップシリーズ、その他主要な国際大会、強豪国国内の主要競技会、日本国内での主要競技会である。該当選手の最も高い D スコアが複数の大会で同スコアとなっている場合は、一競技会のみ取り上げた。

世界の状況を把握し、現場での目標の指標のひとつとして参考にして頂きたい。

◇ 発表された競技会と省略記載

競 技 会	記 載	競 技 会	記 載
世界選手権 (予選)	WGC 予	全日本個人 (トライアル含)	AJ 個
世界選手権 (種目別)	WGC 種	NHK 杯	N 杯
世界選手権 (個人総合決勝)	WGC 個	全日本種目別	AJ 種
ワールドカップ・メルボルン大会	Melbourne	ワールドカップ・ドーハ大会	Doha
ワールドカップ・バクー大会	Baku	ワールドカップ・コトブス大会	Cottbus
ワールドカップ・シュツットガルト	Stuttgart	ワールドカップ・バーミンガム	Birm
ワールドカップ・東京	Tokyo	全日本インカレ	インカレ
チャレンジカップ・Varna	Varna	全日本シニア	シニア
チャレンジカップ・Paris	Paris	全日本団体	AJ 団
チャレンジカップ Ljubljana	LJU	アジア選手権大会	A・C
チャレンジカップ Szombathely	SBH	中国運動会 (国内大会)	NC 中国
2017 ヨーロッパ選手権	E・C	全国中国選手権 (国内大会)	AC 中国
ユニバーシアード大会・台湾	UNIV	豊田国際	TOYOTA
個人総合スーパーファイナル	SPF	英国大会 (国内大会)	NC 英国

※世界ランキングで日本人が国際大会で発表の場合は日本、国内大会の場合、所属先で表記

【個人総合】世界ランキング

Rk.	選手	所属	FX	PH	SR	VT	PB	HB	AA	競技会
1	VERNIAIEV O	UKR	6.2	6.4	6.1	5.6	6.7	5.7	36.7	WGC 個 17
2	LARDUET M	CUB	6.0	5.8	6.1	5.6	6.4	6.3	36.2	WGC 予 17
3	NAGORNY N	RUS	6.4	5.9	6.0	5.6	6.4	5.8	36.1	WGC 個 18
4	白井 健三	日本体育大学	7.1	5.4	5.7	5.6	6.1	6.1	36.0	SPF18
5	LIN Chaopan	CHN	6.2	5.8	5.6	5.6	6.4	6.2	35.8	WGC 個 17
5	XIAO Ruoteng	CHN	6.1	6.1	5.7	5.6	6.2	6.1	35.8	WGC 予 18
7	萱 和磨	順天堂大学	5.9	6.4	6.1	5.2	6.3	5.7	35.6	N 杯 18
8	BELYAVSKIY D	RUS	5.8	6.4	5.5	5.6	6.4	5.8	35.5	WGC 予 17
9	CALVO M J	COL	5.8	6.3	5.5	5.2	6.5	6.1	35.4	WGC 個 17
9	加藤 凌平	コナミススポーツ	6.2	5.8	5.5	5.6	6.1	6.2	35.4	シニア 17
9	DENG Shudi	CHN	6.2	5.8	5.7	5.2	6.4	6.1	35.4	AC 中国 18
9	谷川 航	日本	6.0	5.8	6.0	5.6	6.2	5.8	35.4	Tokyo18
13	山室 光史	コナミススポーツ	5.7	6.2	6.2	5.6	6.5	5.1	35.3	N 杯 17
13	DALALOYAN A	RUS	6.2	5.5	5.9	5.6	6.4	5.7	35.3	WGC 個 18

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	FX	PH	SR	VT	PB	HB	AA	競技会
1	白井 健三	日本体育大学	7.1	5.4	5.7	5.6	6.1	6.1	36.0	SPF18
2	萱 和磨	順天堂大学	5.9	6.4	6.1	5.2	6.3	5.7	35.6	N 杯 18
3	加藤 凌平	コナミスポーツ	6.2	5.8	5.5	5.6	6.1	6.2	35.4	シニア 17
3	谷川 航	順天堂大学	6.0	5.8	6.0	5.6	6.2	5.8	35.4	Tokyo18
5	山室 光史	コナミスポーツ	5.7	6.2	6.2	5.6	6.5	5.1	35.3	N 杯 17
6	千葉 健太	順天堂大学	6.0	6.0	5.5	5.6	6.2	5.9	35.2	Tokyo18
7	野々村笙吾	セントラル	5.7	5.7	6.2	5.2	6.4	5.9	35.1	N 杯 17
7	前野 風哉	鹿屋体育大学	5.8	6.1	5.8	5.6	5.7	6.1	35.1	AJ 団 17
7	内村 航平	リンガーハット	6.0	5.7	5.7	5.2	6.1	6.4	35.1	N 杯 18

【ゆか】

世界ランキング

Rk.	選手	国名	D スコア	競技会
1	白井 健三	日本体育大学	7.2	N 杯 18
2	REMKEs Christopher	AUS	6.8	Melbourne18
3	NAGORNY Nikita	RUS	6.7	WGC 予 17
3	五島 誉博	相好体操クラブ	6.7	N 杯 18
5	LANKIN Dmitrii	RUS	6.6	Cottbus17
5	DOLGOPYAT Artem	ISR	6.6	Cottbus18
7	MARIAN Dragulescu	ROU	6.5	SBH17
7	REMKEs Christopher	AUS	6.5	WGC 予 17

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	D スコア	競技会
1	白井 健三	日本体育大学	7.2	N 杯 18
2	五島 誉博	相好体操クラブ	6.7	N 杯 18
3	佐藤 巧	徳洲会	6.4	N 杯 18
3	南 一輝	仙台大学	6.4	N 杯 18
3	松見 一希	仙台大学	6.4	AJ 団 18

【あん馬】

世界ランキング

Rk.	選手	国名	D スコア	競技会
1	WHITLOCK Max	GBR	7.0	WGC 団 18
2	VERNIAIEV Oleg	UKR	6.7	UNIV17
2	杉野 正堯	鹿屋体育大学	6.7	AJ 団 18
4	萱 和磨	順天堂大学	6.6	AJ 種 18
4	長谷川智将	日本	6.6	豊田国際 18
4	XIAO Ruoteng	CHN	6.6	WGC 種 18

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	D スコア	競技会
1	杉野 正堯	鹿屋体育大学	6.7	AJ 団 18
2	萱 和磨	順天堂大学	6.6	AJ 種 18
2	長谷川智将	徳洲会	6.6	豊田国際 18
4	亀山 耕平	徳洲会	6.5	N 杯 18
4	今林 開人	セントラル	6.5	AJ 個 18
4	前田 航輝	筑波大学	6.5	N 杯 18
4	永吉 雄	相好体操クラブ	6.5	AJ 種 18

【つり輪】

世界ランキング

Rk.	選手	国名	D スコア	競技会
1	LIU Yang	CHN	6.5	AC 中国 18
2	YAN Mingyong	CHN	6.4	NC 中国 17
2	TULLOCH Courtney	GBR	6.4	NC 英国 17
2	DAVTYAN Vahagn	ARM	6.4	Doha17
2	LEI Peng	CHN	6.4	NC 中国 17
2	PETROUNIAS E	GRE	6.4	AGF18
2	YOU Hao	CHN	6.4	Cottbus18
2	Lan xingyu	CHN	6.4	AC 中国 18
2	TULLOCH Courtney	GBR	6.4	豊田国際 18

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	D スコア	競技会
1	野々村 笙吾	セントラルスポーツ	6.3	AJ 種 17
1	岡村 康宏	朝日生命	6.3	N 杯 17
1	神本 雄也	コナミスポーツ	6.3	N 杯 17
1	足立 大樹	日本体育大学	6.3	N 杯 17
1	長野 託也	朝日生命	6.3	N 杯 18

【跳馬】

跳越技 6.0 実施選手（世界）

	選手	国名	D スコア	競技会	跳越技
1	MEDVEDEV A	ISR	6.0	E・C17	屈身ドラグレスク
1	WHITTENBURG D	USA	6.0	WGC 種 17	リ・セグエン
1	YANG Hakseoun	KOR	6.0	WGC 予 17	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	RADIVILOV I	UKR	6.0	E・C17	屈身ドラグレスク
1	白井 健三	日本体育大学	6.0	AJ 種 17	シライ 2
1	小倉 佳祐	早稲田大学	6.0	AJ 種 17	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	NINREYES Audrs	DOM	6.0	WGC 予 18	リ・セグエン
1	RI Se Gwanng	PRK	6.0	WGC 種 18	リ・セグエン 屈身ドラグレスク
1	安里 圭亮	日本	6.0	Melbourne18	リ・セグエン
1	遠藤 幹斗	静岡産業大学	6.0	AJ 種 18	ヤン・ハクソン
1	大久保圭太郎	順天堂大学	6.0	AJ 種 18	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	長谷川瑞樹	鹿屋体育大学	6.0	AJ 団 18	ヤン・ハクソン
1	米倉 英信	日本	6.0	Cottbus18	伸身カサマツ 5/2 ひねり

跳越技 6.0、5.8 実施選手（日本）

	選手	所属	D スコア	競技会	跳越技
1	白井 健三	日本体育大学	6.0	AJ 種 17	シライ 2
1	小倉 佳祐	早稲田大学	6.0	AJ 種 17	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	安里 圭亮	相好体操クラブ	6.0	Melbourne18	リ・セグエン
1	遠藤 幹斗	静岡産業大学	6.0	AJ 種 18	ヤン・ハクソン
1	大久保圭太郎	順天堂大学	6.0	AJ 種 18	伸身カサマツ 5/2 ひねり
1	長谷川瑞樹	鹿屋体育大学	6.0	AJ 団 18	ヤン・ハクソン
1	米倉 英信	福岡大学	6.0	Cottbus18	伸身カサマツ 5/2 ひねり
8	内村 航平	リンガーハット	5.8	WGC 予 17	リー・シャオペン

【平行棒】

世界ランキング

Rk.	選手	国名	D スコア	競技会
1	ZOU Jingyuan	CHN	7.0	WGC 種 18
2	VERNIAIEV Oleg	UKR	6.7	WGC 種 18
3	LIU Rongbing	CHN	6.6	NC 中国 17
3	YOU Hao	CHN	6.6	AC 中国 18
3	ARICAN Ferhat	TUR	6.6	WGC 予 18
6	LANKIN Dmitrii	RUS	6.5	Stuttgart17
6	山室 光史	コナミスポーツ	6.5	N 杯 17
6	XIAO Ruoteng	CHN	6.5	Cottbus18
6	NGUYEN Marcel	GER	6.5	E・C18
6	PAKHNIUK Petro	UKR	6.5	E・C18
6	神本 雄也	コナミ	6.5	N 杯 18

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	D スコア	競技会
1	山室 光史	コナミスポーツ	6.5	N 杯 17
1	神本 雄也	コナミスポーツ	6.5	N 杯 18
2	野々村 笙吾	セントラル	6.4	N 杯 17
2	山本 翔一	朝日生命	6.4	AJ 種 17
2	千葉 健太	順天堂大学	6.4	AJ 種 17
2	垣谷 拓斗	セントラル	6.4	AJ 種 17

【鉄棒】

世界ランキング

Rk.	選手	国名	D スコア	競技会
1	齊藤 優佑	徳洲会	7.0	AJ 種 17
2	内村 航平	リンガーハット	6.9	AJ 種 17
3	BRAEGGER Pablo	SUI	6.8	E・C17
4	宮地 秀享	日本	6.7	WGC 個 17
4	市瀬 達貴	朝日生命	6.7	AJ 種 17
4	ZONDERLAND Epke	NED	6.7	E・C18
7	ZHANG Chenglong	CHN	6.6	NC 中国 17
7	BRETSCHNEIDER Andreas	GER	6.6	Paris17

日本人ランキング

Rk.	選手	所属	D スコア	競技会
1	齊藤 優佑	徳洲会	7.0	AJ 種 17
2	内村 航平	リンガーハット	6.9	AJ 種 17
3	市瀬 達貴	朝日生命	6.7	AJ 種 17
3	宮地 秀享	茗溪クラブ	6.7	WGC 個 17
5	田中 佑典	コナミ	6.5	AJ 団 17
6	横井 君宇	日本体育大学	6.3	AJtry18
6	浅野 佑樹	早稲田大学大学院	6.3	AJ 種 17
6	横山 聖	コナミスポーツ	6.3	N 杯 18
6	小浜 廣仁	TEAM えひめ	6.3	N 杯 18

5. 2017 年版採点規則修正、追加情報

1. 2017 年版採点規則正誤表

日本語版 2017 年版採点規則の誤植・追加等による訂正

ページ	訂正箇所	誤		正
p121	IV-36	後方かかえ込み 3 回宙返り下り	⇒	難度表記 <u>G</u> を追加
p161	I -95	前方開脚宙返り支持経過懸垂	⇒	前方 <u>宙返り</u> 開脚抜き支持経過懸垂
p161	I -100	前方開脚宙返り抜き腕支持	⇒	前方 <u>宙返り</u> 開脚抜き腕支持
p161	I -101	前方開脚宙返り抜き屈腕支持	⇒	前方 <u>宙返り</u> 開脚抜き屈腕支持
p167	II-53	後ろ振り上がり前方開脚宙返り腕支持	⇒	後ろ振り上がり前方 <u>宙返り</u> 開脚抜き腕支持
p177	タジェダ	技番号訂正 III-124	⇒	III- <u>125</u>

2. 2018 年 1 月公表の FIG Code of Points 2018.1 月版での変更箇所

※黄色塗りつぶしは、本号であらたに修正・追加された箇所

(1) 一般条項

該当箇所	変更種	内容												
P9 減点表	項目削除	演技中、コーチが選手に話しかける ※P11、コーチの行為にて対応												
P9 減点表	項目追加	公式ウォームアップ時間を守らない：決定点から毎回 0.30 減点（審判長によって）												
P10 減点表	項目追加	公式ウォームアップ時間を守らない：チーム得点から毎回 1.00 減点（審判長によって）												
P21 7－4 条 5.d)	文言追加	各種目において、難度表に記載されていない開脚の力技または静止技を実施した場合。												
P28 9－2 条 13.	文言追加	つり輪において、振動または引き上げから静止姿勢に移る間、肩は最終的な静止姿勢より上げてから持ち込んではならない。												
P28 9－2 条 17.	表の移動	着地に関する減点表は 16.の後に移動する												
P28 9－2 条 17.	項目追加 (文章変更)	着地に関して「小さくとぶ」とは、最大でも足ひとつ分の幅・距離を指す。それよりも大きな一歩はどんな場合も、「大きく 1 歩」として中欠点の減点となる。												
P28 9－2 条 17.	番号変更	17.に項目を追加した事により、17.の文が 18.にずれる。												
P26 9－2 条 7	文章追加	<table border="1"> <thead> <tr> <th>欠点</th><th>角度</th><th>減点</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>わずかにまがる</td><td>> 0° - 45°</td><td>0.1</td></tr> <tr> <td>明らかにまがる</td><td>>45° - 90°</td><td>0.3</td></tr> <tr> <td>極端にまがる</td><td>>90°</td><td>0.5</td></tr> </tbody> </table> 唯一の例外： - 平行棒・モイまたは車輪系の技のスイング動作中に水平位以前に、およびバブサー系の技の後に脚をまげること - 鉄棒・振動中の脚をまげること、および手放し技でバーをつかむ際の腕をまげること	欠点	角度	減点	わずかにまがる	> 0° - 45°	0.1	明らかにまがる	>45° - 90°	0.3	極端にまがる	>90°	0.5
欠点	角度	減点												
わずかにまがる	> 0° - 45°	0.1												
明らかにまがる	>45° - 90°	0.3												
極端にまがる	>90°	0.5												

(2) ゆか

①ゆか条文

該当箇所	変更種	内容
P34 10-2条-1 c)	文章変更	(項目の文末に次の文を追加) 選手はフロアエリア全面を使用しなければならない。アクロバット技に際して同一対角線の使用回数には制限がない。しかし、各コーナーを使用しなければならない、不使用の場合演技につき一回、D審判による0.30のニュートラルディダクションとなる。 最終タンブリングで未使用のコーナーへ向かえば、このコーナーは使用したものとすることができる。
P35 10-2条-25.組合せについて(CV) .	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 加点のために2つ(以上)の技を組合せる際、不安定な着地で大過失の減点があった場合、または直接とび正面支持臥になった場合は、組合せ加点は与えられない。
P37 10-3条 E審判の表	文言削除	減点表中の「転倒=1.00」の文言を削除
P37 10-3条 D審判の表	項目削除	終末技が跳躍技ではない、または認められていない技(転など)で終わる

②ゆか難度表

該当箇所	変更種	内容
I-44・45	文の追加	(難度表内に以下の文を追加) 「これらの技は倒立から行わないでも認定する事ができる」
II-48	技の追加	前方伸身宙返り 7/2 ひねり (ゴシマ) : G 難度
II-60	技の追加	前方かかえ込み 2 回宙返り 3/2 ひねり (ザパタ) : G 難度
III-7・8	文の追加	「後ろとびひねりからのものも含む」
技番号未定	技の追加	前転から手を広げた開脚浮腰支持経過十字倒立(リーク) : C 難度 (I)
III-23	技名追加	「ゴンザレス」

(3) あん馬

①あん馬条文

該当箇所	変更種	内容
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 a 5.)	項目追加	※新しい項目 「1回の旋回で正面横移動(馬端馬背から両把手を越えて逆馬端馬背)」で、D難度を得るためには、把手を使用してはならない。
	項目番号変更	a 5) より項目番号がずれる a 6.) → a 7.) a 7.) → a 8.) a 8.) → a 9.) a 9.) → a 10.)
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 新 a 6.)	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 落下に関する規定をより明確にするため、全てのグループII・IIIの技は、倒立に上げて開脚での支持に下ろす技を除き、価値を得るためには難度表に掲載された技に続ける必要がある。落下した場合は部分的な価値も与えることはできない。次に続く技が開始された後に落下した場合は、前の技を認定することができる。

P62 1 1-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 旧 a 9.)	項目削除	以下、すべて削除。 トンフェイは開始/終了の体勢により、4つのタイプに分類される。 その内3つのタイプは、終末局面で完全な旋回をもって技の完了とし、難度を認める。(横～縦、縦～横、縦～縦)								
P62 1 1-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 新 a 9.)	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 「ウ・グォニアンの上に、難度表に記載のいかなる技でも続けることができる(ロシアン 180°や 360°等)」								
P62 1 1-2条-2 2. 補足説明	番号変更	・モギルニー(Ⅲ-70)は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。 ・ベレンキ(Ⅲ-76)は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。								
P65 1 1-2条-2 3. 特別な繰り返し a)	番号変更 追加	・ドリッグス(E:Ⅲ-41) ・縦向き前移動(3/3:馬端～把手～把手～馬端)(C:Ⅲ-45) ・マジヤール(D:Ⅲ-46) ・開脚旋回縦向き 3/3 前移動(E:Ⅲ-53) ・ビロゼルチェフ(C:Ⅲ-51) ・縦向き後ろ移動(3/3:馬端～把手～把手～馬端)(C:Ⅲ-57) ・シバド(D:Ⅲ-58) ・開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動(E:Ⅲ-65) ・縦向きとび後ろ移動(馬端～馬端)(E:Ⅲ-59)								
P66 1 1-2条-2 3. 特別な繰り返し b)	番号変更	ロシアン転向技は、終末技を含めて演技中2回まで認めるものとする。ロシアン転向を含む一把手上で行うコンバインや、移動を伴うクロル、ウ・グォニアン、ロス、トンフェイ等に関してはこの規定を適用しない。(Ⅲ-87、88、89、81、82、94、95)								
P67 11-3条 E 審判	文章追加	<table><tr><td>振幅</td><td>減点</td></tr><tr><td>肩の高さより上</td><td>0.0</td></tr><tr><td>肩と水平位の間</td><td>0.1</td></tr><tr><td>水平位よりも下</td><td>0.3</td></tr></table>	振幅	減点	肩の高さより上	0.0	肩と水平位の間	0.1	水平位よりも下	0.3
振幅	減点									
肩の高さより上	0.0									
肩と水平位の間	0.1									
水平位よりも下	0.3									

②あん馬難度表

該当箇所	変更種	内容(移動先)
Ⅱ-27	技の追加	両把手を挟んで横向き(開脚)旋回ひねり(ケイハ2):C 難度
Ⅱ-30	技の追加	両把手を挟んで横向き(開脚)旋回1回ひねり(ケイハ):F 難度
Ⅱ-69	技名の追加	ベルトンチェリ
Ⅲ-47	技番号移動	Ⅲ-53
Ⅲ-59	技番号移動	Ⅲ-65
Ⅲ-59	技の追加	縦向きとび後ろ移動(馬端～馬端)(カルバノフ):E 難度
Ⅲ-63	技番号移動	Ⅲ-69
Ⅲ-64	技番号移動	Ⅲ-70
Ⅲ-70	技番号移動	Ⅲ-76
Ⅲ-75	技番号移動	Ⅲ-81
Ⅲ-76	技番号移動	Ⅲ-82
Ⅲ-81	技番号移動	Ⅲ-87
Ⅲ-82	技番号移動	Ⅲ-88

Ⅲ-83	技番号移動	Ⅲ-89
Ⅲ-88	技番号移動	Ⅲ-94
Ⅲ-89	技番号移動	Ⅲ-95
技番号未定	技の追加	両把手を挟んでシュテクリ A (DSA) (ケイハ 3) : D 難度
技番号未定	技の追加	両把手を挟んで外向き旋回ひねり (ケイハ 4) : E 難度 (Ⅲ)
Ⅱ-30	技の追加	両把手を挟んで外向き旋回一回ひねり (2 回以内の旋回で) (ケイハ 5) F 難度 (Ⅱ)

(4) つり輪

①つり輪条文

該当箇所	変更種	内容
P91 1 2・2 条・2 2.	文章追加	グループⅡやⅢを連続して4回続けることはできず、D審判によって難度は認定されない。3連続の後にグループⅠのB難度以上の技が入れば改めて3連続が可能である(ただし、け上がり・後方け上がり系、およびその同一棒の技を除く)。このB難度以上の振動技はカウントされる10技内でかつ同一グループ内で上位5技以内に含まれていなければならない。 行われたグループⅡ・Ⅲの技は全て、カウントされる10技内であってもなくても、また技術欠点により不認定になったとしても、この項目に抵触するものとする。
P91 1 2・2 条・2 3. 特別な繰り返し c)	項目追加	基本的な支持姿勢である脚前挙支持と脚上挙支持は、違った力技だと考えられるため、この特別な繰り返しの項目には当てはまらないものとする。よって前振り上がり脚前挙支持と前振り上がり脚上挙支持を両方実施することができる。しかし「終末姿勢が同一の力静止技は各グループで1技だけ」とする制約により、例えばけ上がり脚前挙支持と前振り上がり脚前挙支持を実施することはできない。
P92 1 2・2 条・2 4. 補足説明 f)	文言削除	「停滞」を削除 ヤマワキやジョナサンで完全な支持や停滞がみられた場合
P92 1 2・2 条・2 4. 補足説明 g)	項目追加	「輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂」で持ち込む際に45°以上の角度の逸脱は難度を認定しない。また意図した技とは異なるため、部分的な難度も与えられない。 (以降、項目番号がずれる)
	項目番号変更	g) より項目番号がずれる g) → 新h) h) → 新i) i) → 新j) j) → 新k) k) → 新l) l) → 新m) m) → 新n)
P92 1 2・2 条・2 4. 補足説明 新n)	文言追加	演技には1つの振動倒立技(2秒)が必要であり、カウントする10技に入っていないなければならない (ジュニア: 8技) 。

②つり輪難度表

該当箇所	変更種	内容（移動先）
Ⅱ-23	技の追加	懸垂から伸腕で引き上げ脚上拳十字懸垂（2秒）（コラック）E 難度
Ⅱ-113	技の追加	ゆっくりと前方伸腕伸身支持回転十字懸垂経過中水平支持（2秒）（ファム 2）：E 難度
Ⅳ-42	技の追加	後方屈身 3 回宙返り下り（ウィッテンバーグ）：H 難度
Ⅳ-39	技番号移動	Ⅳ-45
Ⅳ-40	技番号移動	Ⅳ-46
Ⅳ-41	技番号移動	Ⅳ-47
Ⅳ-42	技番号移動	Ⅳ-48
Ⅳ-45	技番号移動	Ⅳ-51
Ⅳ-46	技番号移動	Ⅳ-52
Ⅳ-48	技番号移動	Ⅳ-54

（5）跳馬

該当箇所	変更種	内容
跳越番号 110	価値点変更	3.6
跳越番号 111	価値点変更	4.0
跳越番号 230	価値点変更	3.6
跳越番号 342	価値点変更	3.6
跳越番号 574	技名追加	「シライ 3」
跳越番号 386	技名追加	「ヤン・ウェイ」

（6）平行棒

①平行棒条文

該当箇所	変更種	内容
P151 1 4-2 条-1 6.	文言訂正	演技実施の減点に関しては、第 9 章および 9-4 条と 1 4-3 条における減点表を参照のこと。
P152 1 4-2 条-2 3. 補足説明 g)	項目追加	バブサーの実施について、バーを握る際は水平位で肩角度を開き、伸身で実施すべきである。バーを握る際に、身体が水平位から 45°以上の逸脱、または 90°の肩角度があった場合は、技の価値が与えられず、大欠点の減点となる。
P152 1 4-2 条-2 4. 特別な繰り返し a)	技名訂正 文章追加	前方 5/4 宙返り開脚抜き腕支持と屈腕支持、または支持経過懸垂や直接懸垂になる技 補足としてⅢ-47、58、59、65 は一括してこの規則に該当する。
P152 1 4-2 条-2 4. 特別な繰り返し c)	番号追加	最大 2 回までの棒下宙返り（逆上がり）倒立技 （Ⅲ-106、107、108、114、119、120、123、124、130、131、136）
P152 1 4-2 条-2 5.	文言訂正	技として認められない原則や D スコアに関する他の詳細項目は第 7 章および 9 - 4 条、1 4 - 3 条の減点表を参照のこと。
P153 平行棒特有の減点	追加	「公式ウォームアップ時間を守らない」の項目は「D 審判」の項目表として独立して巻頭に配置。
P153 平行棒特有の減点	項目追加	（「E 審判」の減点が続く） ・モイ、後方車輪、水平位よりも早く脚がまがる：小・中欠点 ・バブサー等、水平位でバーを握り懸垂になる技で、け上がりの際の膝がまがる：中欠点

②平行棒難度表

該当箇所	変更種	内容（移動先）
I-9	技の追加	前振り開脚抜き直接懸垂（バボス）：C 難度
II-3	技の追加	前振り上がり開脚抜き懸垂（ムンテアン）：C 難度
III-42	技の追加	懸垂前振り片腕支持 3/4 ひねり単棒倒立経過、軸手を換えて 3/4 ひねり支持（バウマン）：F 難度
III-123	技の追加	棒下宙返り、かかえ込み姿勢でひねり腕支持（ギャニオン）：C 難度
III-124	技の追加	棒下宙返り、伸身姿勢でひねり腕支持（ギャニオン 2）：D 難度
III-121	技番号移動	III-127
III-122	技番号移動	III-128
III-128	技番号移動	III-134

（7）鉄棒

①鉄棒条文

該当箇所	変更種	内容
P188 15-3 条 鉄棒特有の減点	削除	「D 審判（ニュートラルディダクション）」の表
P188 15-3 条 鉄棒特有の減点	項目追加	エンドーやシュタルダーとワイラーの開始時の倒立位からの逸脱：小・中・大欠点（難度は認定）

②鉄棒難度表

該当箇所	変更種	内容（移動先）
III-86	技番号移動	順手背面懸垂前振り上がりひねり支持（オノ）（I-74 〜）
II-46	〃	II-40
II-47	〃	II-5
II-52	〃	II-58
II-54	〃	II-60
II-57	〃	II-39
II-59	〃	II-71
II-60	〃	II-72
II-63	〃	II-45
II-66	〃	II-90
II-66	技の追加	ゲイロード 1 回ひねり（コーディノフ）：G 難度
II-69	技番号移動	II-51
II-72	〃	II-54
II-83	〃	II-89
II-89	〃	II-83
II-90	〃	II-96
II-96	〃	II-102
III-57	技の削除	シュタルダーとび大逆手持ち換え

6. おわりに

審判委員会
体操競技男子審判本部
本部長 高橋 孝徳

2018年は日本の男子体操界にとって大きな課題の残る年となりました。ドーハでの世界選手権では団体総合で中国、ロシアの後塵を拝し、個人総合は23年ぶりのメダルなし、種目別も含め金メダルを獲得できずに終わりました。アジア競技大会においては、団体戦で中国に12.80の大差をつけられる結果でした。2016年のオリンピックリオデジャネイロ大会の功績から急落し、強豪国の進展、新ルールにおける技の認定や評価の潮流に対応できていなかったことを否めません。

採点規則は2006年より現在のD・E形式の採点方式に改訂されました。当時の日本は長い間、Eスコアの高さで勝負をしていた一方、Dスコアの底上げが課題であり、常に演技の難易度を上げる事を求められていました。その結果、Dスコア向上への意識は高まりましたが、重要視されるのは技の認定の是非に関する判断基準が多くを占めていたように感じます。ひとつひとつの技の完成形を目指すとき、認定される素形態の捌きから減点のない実施へ、その先の魅了する技捌きの域に至る探求心と修練が存在するはずです。しかしながら、いつの間にか高難度技の導入やDスコアの高さに満足し、演技の質について目を向けることが疎かになっていることが拡散していたように感じます。我々日本人が根幹としていた「美しい体操」に対する意識と取り組みは気づかないほどに僅かずつ衰えてしまっていないでしょうか。

この状況を鑑み、強化本部は基礎・基本からの動きの構築の重要性を謳い、その対策に取り掛かりました。姿勢、表現、技術、体力強化等に関し、アクロなど様々な分野からアプローチし、垣根を越えて有益な技術情報を取得しようと取り組んでいます。また1月には中国・北京、2月には味の素NTCにて中国チームとの合同合宿を実施し、奮励しています。これらの取り組みの志向はナショナル選手だけが対象ではなく、全ての選手・指導者に同様の意識をもって取り組んでいただきたいと期するところです。

昨年より第32回オリンピック競技大会（2020／東京）の予選が始まり、日本男子体操はいち早く団体の出場権を得ることができました。これからの勝負は、日本が追い求めてきた美しい体操を取り戻し、停滞したこの位置からの巻き返しを図らなければなりません。東京2020大会まで1年余りと僅かな期間において、最大の目標を叶えるためには創意工夫に満ちた戦略とそれを可能にする甚大な努力、また関係するすべての総合力の結集が肝要です。選手・指導者の皆様は現行ルールを熟知するとともに本情報を精読し、2019年度の大会に臨んで頂きたいと存じます。

審判員は採点規則に精通するとともに本情報を熟読し研鑽を積んでください。審判業務を遂行するに当たっては規則を遵守することはもちろんのこと、体操競技の本質を今一度鑑み、一演技ごと注力して採点に取り組んでいただきたいと存じます。

2018年度より、U-15、U-12の新規則が適用されました。これによりルールの大枠を一本化しつつ、成長過程に合わせながら、段階的に競技力が進展していくことを期待しています。新ルール適用の初年度でありましたが採点に関しては、携わっていただいた審判員の方々のご尽力により、各競技会が大きな混乱や問題なく、滞りなく進行されましたことに感謝申し上げます。評価基準については、従前の採点から見方を切り替えていただき、一般規則の評価基準と同様に理想像を常に念頭におき、採点業務に当たっていただきますようお願いいたします。

本情報では、世界選手権報告、2018年度の総括（一般、ジュニア規則）、Dスコアランキングを掲載してあります。また、別刷りでは、競技会に必要な各種目の採点指針の詳細、競技会における同点への対処としてタイ・ブレイク等をまとめてあります。

関係される皆様が、本情報を参考に競技会にてスムーズな運営、採点が出来ますこと、選手の方々の競技力が更なる進化、成長を成し遂げることを祈念いたします。

平成 31 年 3 月 2 日

男子体操競技情報 27 号 《 別刷 》

(公財) 日本体操協会
東京オリンピック男子体操競技強化本部
審判委員会体操競技男子審判本部

【目次】

1. 難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達……………	1
2. タイ・ブレイク (2019 年 FIG 競技規則版) ……………	24
3. 2019 年度国内内規および通達……………	25

□ 一般条項

1. 服装違反の減点は、発覚した種目で 1 回のみ決定点から減点 (0.30 : 国内対応) とする。審判長は、次の種目以降の D1 (主審) に伝達する。
2. オーダーミスは、発覚した最初の選手の決定点から減点 (0.30 : 国内対応) とする。
3. D スコアへの質問は国内対応としてローテーション内でも認める。最終演技者の場合、次のローテーションのウォームアップ内でも認める。
4. 難度表の●印は、FIG 制定の年齢によるジュニア競技会用の規則であり、国内ジュニア大会とは無関係である。
5. 器械の準備について
平行棒について、演技に先立ち (ウォームアップまたは競技で)、競技場内に入れる登録者であれば誰でも器械の準備を行う事ができる。準備が可能な人数は最大 3 名 (選手と他に 2 名) とする。
6. 演技中のプロテクターの破損 (つり輪、鉄棒)
プロテクターがはっきりと切れ、落下や中断につながった場合、選手は減点なしで演技全体をやり直すことができる。その際は審判長の許可を得て演技はローテーションの最後に行う。元々最終演技者であった場合は審判長の裁量で許された時間の後に演技を行う。
選手が演技やり直しの許可を得るためには、ただちに破損したプロテクターを D1 審判に見せなければならない。
7. 落下について (演技再開までの時間設定)
 - 器械からの落下についてはいかなる場合も 1.00 の減点を受け、演技再開までには 30 秒の時間が与えられる。時間の計測は、基本的に選手が立った時点からであるが、立ち上がるのが遅い場合は選手自身の安全が確認できた時点で計測を開始する。30 秒を超過した場合、演技を続行することができるが、追加で 0.30 のニュートラルディダクションが適用される。60 秒を超えても再開しなかった場合、演技終了とみなされる。足が地面から離れた時点で計測が停止され、演技再開となる。
 - 器械からの落下後において、選手が故意に立ち上がることなく、落下の計測が始まるのを避ける態度 (休息、プロテクターの調整、マグネシウムをコーチに準備させる、正当な理由なく競技を遅延させる) をとった場合は、2-4 条 e) の記述に基づき次の規則の適用があり得る。: 「その他のふさわしくない行為 - D1 審判によって決定点から 0.30 減点」

8. 演技の開始

30 秒以内に演技を開始できなかった場合、0.30 のニュートラルディダクションが適用される。60 秒以内に演技を開始しない場合、演技を開始する権利を失う。

9. 9-2 条.9 に関して：「いかなる理由でも難度の認められなかった力静止技からの引き上げ技は、難度が認められない。」とあるが、最終終末姿勢の部分については認定する事ができる。

- 例) ・ つり輪一け上がり十字懸垂 (角度不認定) から伸腕伸身中水平支持 (中水平支持で完璧な実施) (II-89) = この場合、中水平支持 (II-10) は D 難度で認定することができる。
- ・ ゆか一水平支持 (静止なし) から伸腕伸身力倒立 (2 秒) (I-33) = この場合、倒立 (I-19) の A 難度は認定することができる。

10. 新技について

● 競技での評価について

- ・ 競技予定表の規定通り遅れる事なく提出されなければならない。
- ・ 難度評価にあたり、申請はイラストを添え、USB メモリーによる映像を必須とする。
- ・ FIG の TC に承認されるまで、競技で与えられた価値は全て暫定的なものとする。
- ・ オリンピック予選競技で演じられる新技は、当該競技に際し、TC 委員長による仮評価の確認を要する。
- ・ 競技における評価は可能な限り早く、書面で当該所属と、競技前の審判会議で審判に伝達される。
- ・ 決定事項は当該競技においてのみ有効である。
- ・ 提出を受け、担当 TC に確認された新技は、競技で技が成功した場合のみ MAG の NL に初めて記載される。

● 選手名の命名について：(2018 年 2 月 1 日から有効)

国際試合で最初に発表されたもので、FIG 公式のグループ 1~3 競技 (FIG の公式な派遣があってもなくても)、またはグループ 4 競技 (FIG の公式派遣) において、

- ・ C 難度以上の実施
- ・ TC の演技分析を受け、確認された場合のみ名前と難度が与えられる。
- ・ 複数の選手が同時に同一の競技会で同じ新技を発表した場合は、全ての選手名が名付けられる。
- ・ 所属の選手は意図する新技の映像を、FIG の TC 委員長に、競技会終了後可能な限り早く、提出する義務がある。加えて、競技会に派遣された担当は、コーチが提出した公式の映像、元の映像、書面を (可能であれば) 提出の上、競技で与えた仮評価の詳細について、可能な限り早く FIG の TC 委員長に報告する。

● 選手は大欠点なしに FIG 公式大会で新技を実施した場合に技名を得ることができる。

11. 不安定な着地について

9-4 条 美的・実施欠点による減点、転倒や手の支えのない不安定の着地、中欠点 (0.30) の解釈について

「大きく 1 歩、大きくとぶ」の大きくとは、「一足長」を超える幅や距離を示す。

□ ゆ か

1. 難度認定の確認事項

- 1) ゆかにおいて、終末技はグループⅣの技として判定するとともにグループⅡ・Ⅲ内 5 技の一つとしてもとらえられる。終末技を含めて同一グループの技が 6 技以上あった場合、終末技を最初に数え、最も低い難度の技を除外する。
- 2) グループⅡ・Ⅲの技が終末技のみで実施された場合（その他では実施なし）、その技はグループⅣとみなされ、グループⅡ・Ⅲとしての 0.50 を D スコアに加算しない。
- 3) 終末技で、既に実施された技を繰り返した場合、終末技の難度は不認定となる。
- 4) 演技は両足をそろえて着地する跳躍技で終了しなければならない（グループⅠでは満たせない）。
- 5) ベスト 10 に含まれていない技でも組合せ加点を与えることができるが、繰り返し技やグループ内で 5 技を超えて削除された技との組合せは認定しない。組合せ加点が得られるのは、価値の高い方から最大 2 回までとする（切り返し系の宙返り技を除く）。
- 6) 連続された宙返り技の着地で大欠点があった場合や、瞬時のコントロールも示さずに伏せるような実施（-0.50）は、組合せ加点の対象としない。
- 7) 両足旋回から続けられたロシアン転向技は、両足抜き後の正面支持から転向度数を数える。また、両足旋回を挟まないでロシアン転向技を実施した場合、最初の正面支持から転向度数を数える。
- 8) すべての力倒立技は静止が必要であり、静止時間と技の認定に関してはより厳密に判定する。
- 9) 二つの力技で一つの難度を得る技において、片方に静止がみられなかった場合は、もう片方の低い難度のみを認定する。例えば、マンナ（1秒）から伸腕屈身力倒立（静止無し）を行った場合、マンナの C 難度のみを認定する。静止のない力静止技から倒立（2秒）に持ち込んだ場合は倒立の A 難度のみが認定される。
- 10) 採点規則 10-2 条 2.7.a) の補足説明として、倒立前転開脚浮腰支持経過倒立（Ⅰ-44）・倒立から伸膝前転脚前挙支持経過倒立（Ⅰ-45）は力技に属する。これらの技は、倒立から行う必要はない。



Ⅰ-44

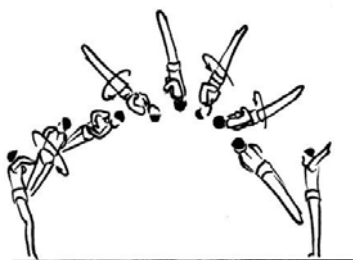


Ⅰ-45

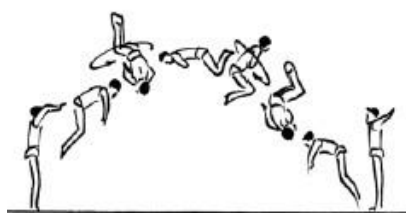
- 11) 一演技中、最大 2 つまでの力技と、2 つまでの旋回系の技の価値が、難度順に認められる。
- 12) 後ろとびひねりから開始される技は、全てグループⅢに該当する枠に統合された。
- 13) 故意に横向きに着地した技は認定されない。
- 14) 開脚座から伸腕屈身力十字倒立で、脚に体重がかかる実施は B 難度で判定する。
- 15) 難度表に記載のない転になる技、開脚の力静止技、開脚のロシアン転向技は認められない。
- 16) 「開脚旋回 270°以上ひねり直接倒立（2 回の旋回で）」では、余分な旋回を挟んだ実施は認められない（ひねり続ける）。「270°以上」「2 回の旋回で」の条件はより厳密に判定する。
- 17) 「開脚旋回とび 1 回ひねり倒立、開脚旋回（2 回のとびを伴う）」では、1 回のとびでは認定しない。またこの技は、前後に技を加えても、難度の格上げにはならない。
例：前にシュピュンデルを行っても、格上げにはならない。

18) 新しく追加された技

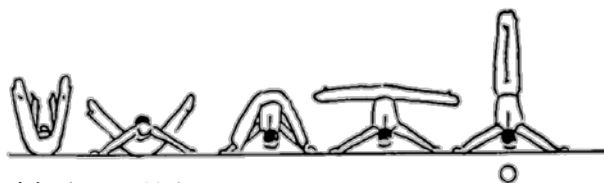
①前方伸身宙返り 7/2 ひねり (ゴシマ) : G 難度 (Ⅱ-48)



②前方かかえ込み2回宙返り 3/2 ひねり (ザパタ) : G 難度 (Ⅱ-60)



③前転から手を広げた開脚浮腰支持経過十字倒立 (リーク) : C 難度 (技番号未定)



19) 新しく追加された技名

①後方伸身宙返り 7/2 ひねり (ゴンザレス) : E 難度 (Ⅲ-23)



2. 演技実施上の確認事項

- 1) すべての力技（力倒立群を含む）には静止が必要であり、静止時間が2秒に満たない場合は0.30、静止が見られない場合は0.50の減点となる。
- 2) ロシアン転向技で反り身の目立つ姿勢は減点（0.10）。
- 3) 「倒立から伸膝前転脚前挙支持経過倒立（2秒）Ⅰ-45」において、脚を抜いて倒立に達する過程で開脚しても減点の対象としない。
- 4) 十字倒立への経過で、速いリズムで倒立に持ち込む捌きの減点（0.10）。
- 5) 脚上挙支持において、上半身と脚部に開きがあるような捌きは柔軟性に欠ける減点の対象となる（0.10、0.30）。マンナは、脚部の裏側が水平で減点なしとなり、9-2 条 8 に則って角度の減点がなされる（ $<15^\circ$: 0.10、 $<30^\circ$: 0.30）。

- 6) タンブリング間の動き・コレオグラフの工夫は演技の持ち味となるが、無味乾燥とした動き、コーナーでの単純な場所取りや方向転換、アクロバット技の前の長すぎる停滞（2秒以上）は減点となる。宙返りの着地後すぐにコーナーなどへ移動する捌きは、安定した着地をとることができる実施を前提とし、不安定な着地姿勢からの移動は実施減点となる（0.10、0.30）。
- 7) コーナーへの単純なステップや移動は、0.10の減点（良い動きで少なくとも180°のターンが含まれなければならない）。宙返りの着地後にジャンプをして伏せる捌きは認められない。安定した着地を示した後にジャンプをして伏せる動きは差し支えない。不安定な着地から前に倒れ込むようなジャンプは大欠点となる。
- 8) アクロバット技の連続で安定した着地を示しても高さ（浮き）がない場合、実施減点となる。
- 9) アクロバット技のやや高さがいい実施の減点（0.10）。
- 10) アクロバット技の連続でひねり不足が明らかな場合の減点（0.30）。
ひねりの過不足による斜め向きの着地から次のアクロバット技につなぐ実施も減点の対象である（小・中・大欠点）。
- 11) 転になる技の支持局面で、手の甲で転になる実施の減点（0.30）。
- 12) 難度表に伸身以外の姿勢の設定がない技は（例：Ⅱ-40「前方伸身宙返り 2 回ひねり」）、伸身で行うものとする。これらの技をかかえ込みや屈身姿勢で実施した場合は、「不明瞭な姿勢」として、0.10・0.30・0.50 の実施減点となる。また、かかえ込み宙返りにおいて不明瞭なかかえ込み姿勢は実施減点となる。
- 13) 2 回（以上）宙返り技は回転ごとではなく、全体で減点とする。≠（例：わずかに脚の開いた 2 回宙返り≠0.20）。
- 14) 倒立へ上げる途中での脚の下がり、減点の対象となる（9-3条2.d）。
15°まで・・・－0.10
16°～30°・・・－0.30
31°～45°・・・－0.50
45°を超える・・・－0.50（不認定）
- 15) 「コントロールされていない瞬間的な着地」に対して、組み合わせにおいて2つ目の技の着地に0.50の減点がある場合、組合せ加点は与えられない。

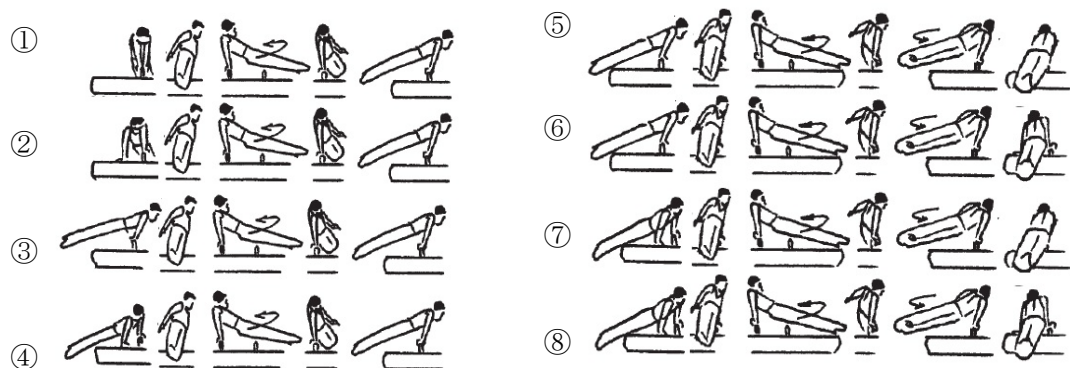
3. ニュートラルディダクション（ND）・・・決定点からの減点

- 1) 一般規則において 2 回宙返り技を実施しない、またはカウントされた10技に含まれない。
・・・0.30
- 2) 各コーナーを使用しなかった場合・・・0.30
※最終タンブリングで未使用のコーナーへ向かうことにより、各コーナーを使用したと認められる。
- 3) その他、ラインや演技時間等の違反があった場合は、所定のNDが課せられる。

□ あん馬

1. 難度認定上の確認事項

- 1) 一把手のすべての交差倒立は、倒立の前後で支持の手あるいは把手を替えなければならない。
- 2) 交差倒立技で片手が把手から落ち把手を握り直した後、どちらかの手が把手から落ちた場合は、難度不認定となり、E審判は0.50（演技停止）または1.00（落下した場合）＋他の実施減点をする。
- 3) 倒立位を経過する交差技や終末技において、倒立への上昇局面で明らかに足先が下がった場合、難度は不認定となる。
- 4) 交差倒立技において足先の動きが馬体を越えずに、腰がまがり過ぎた姿勢から、力を使って倒立に持ち込んだ場合不認定となる。
- 5) 全てのグループⅡとⅢの技（倒立を経過して開脚支持に下ろす技を除く）は認定されるために採点規則に記載している技に繋げる必要がある。例外として両足で前に振り出し（旋回半周）、片脚後ろ抜きで片足振動や交差技に繋げる場合が挙げられる。
例）一把手上でLLSS（Eフロップ）を横向き正面支持で完了し、旋回半周から背面で片脚振動に繋げた場合、D審判はE難度と難度なしで認定する。
- 6) 交差倒立技において、技の前後に難度を上げることを目的とした動きを付け加えることはできない。例）リーニン（Ⅰ-4）に、とび動作を加えても難度の格上げは認めない。
- 7) 他に記載されていない限り、すべての旋回技の開始と終了は正面支持である。下向き転向（フクガ）やショーンで背面支持から片足振動技に繋げた場合、難度不認定となる。
- 8) 一把手上旋回（ループ）は以下の8種類となる。



- 9) 下記に示す捌きはループの3連続と判断され、Dフロップには認定されなくなった。



- 10) ロシアン転向、移動を伴う転向技、フロップ、コンバインで落下した場合は部分的な難度は認定しない。
- 11) フロップとコンバインは直接続けることができず、少なくとも片手が一把手上から放した旋回を挟まなければならない。
- 12) ロシアン転向技の開始局面は、下向き転向の動作が始められた場合、正面支持になったところからとする。
- 13) 旋回倒立の格上げの原則は次の通りである。
 - ・旋回倒立で「360° ひねる」……………1段階の格上げ
 - ・旋回倒立で「180° のひねりを伴う 3/3 移動」……………1段階の格上げ
 - ・旋回倒立から「下ろして旋回を回す」……………1段階の格上げ

- 14) II-51「シュテクリ A（下向き逆転向）倒立、下ろして開脚支持」で「旋回」へ繋がった場合、原則通り D 難度となる。
- 15) ショーン（II-65）とベズゴ（II-83）は両把手正面支持から全転向し両把手正面支持で成立する技である。もし、選手が両把手正面支持で技を完了できなかった場合これらの難度は認められない。
- 16) マジャール移動～外向き旋回～シバド移動を実施する場合の外向き旋回は、馬端外向き正面支持からカウントし正面支持までで A 難度を認定する。



- 17) 一演技中、縦向きでの 3 部分移動は、前移動 1 回、後ろ移動 1 回のみ認定される。マジャール移動 (D) の後に縦向き前移動 (3/3：馬端－把手－把手－馬端) (C) を実施しても難度不認定となる。
縦向きの 3/3 移動は 1 回ずつまでとする制約に抵触する技は以下の 9 技である。
縦向き前移動 (3/3：馬端－把手－把手－馬端) (C) / マジャール移動 (D) / ビロゼルチェフ (C) / ドリッグス (E) / 開脚旋回縦向き 3/3 前移動 (E) / 縦向き後ろ移動 (3/3：馬端－把手－把手－馬端) (C) / シバド移動 (D) / 開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動 (E) / 縦向きとび後ろ移動(馬端～馬端)(E)
ニンレイズ、ニンレイズ 2 はこの原則から除外され、一演技中に両方実施することができる。
- 18) 縦向き前移動の終了局面は縦向き正面支持である。マジャール移動の終末局面で横向き背面支持（入れて横向き背面支持）になるような場合は縦向きの 3 部分移動と判定せず 2 部分 (B 難度) とする。
- 19) 縦向きとび前移動（馬端～馬端）（III-41：ドリッグス）は、明確なとびの後、両手同時正面支持を示した場合に E 難度と判定し、それ以外は D 難度（III-46：マジャール移動）とする。
- 20) 開脚旋回でのマジャール移動とシバド移動は開脚姿勢で移動を完了しなければならない。もし選手が移動を開脚姿勢で完了せず早く脚を閉じた場合、その技は D 難度となる。また、開脚旋回によって難度が上がる移動系の技はマジャール移動とシバド移動のみである。
- 21) ロシアン転向技は、把手上および馬背上において終末技を含めて最大 2 回まで実施することができる。この条項に関しては、終末技を一番目に数え、難度の高い順にカウントされる。ロシアン転向技のカウントに、コンバイン、ウ・グォニアン、ロス、トンフェイ、クロル等は含まれない。
- 22) シバドからロシアン転向技を実施する際、縦向き正面支持を示す前に転向を開始した場合、シバド (D 難度) は成立しロシアン転向の開始は最初の正面支持から転向度数を数える。
- 23) 移動技で落下または停止した場合、部分的に難度を認めることはない。例えば、マジャール移動で 2 つ目の把手を越えて移動を続けようとして落下した場合は、難度は与えられない。
- 24) ウ・グォニアンは、あん部馬背支持に達するまでに 360°の転向を完了し、残りの 360°の転向を馬端馬背支持に達するまでに完了しなければならない。3 部分移動が完了した時点で 360°を転向し、続けて馬端馬背支持で 360°の転向をするような捌きは 2 技と見なす（ロス+ロシアン 360°転向）。
- 25) ウ・グォニアンの後に、あん部馬背ロシアン 180° を続けた場合、E+A を獲得することができる。「～° 以上」という言葉は移動中の転向を指す。
選手の両手が開始から逆の馬端馬背に達し、720°の転向移動が完了したようであれば、転向移

動は完了したものとみなされ、いかなる採点規則掲載の技も新たに行うことができる。（ロシアン 180° や 360° など）

- 26) いかなる移動系の技もその後続くロシアン転向系の技によって難度が上がることはない。
例) トンフェイから下向き転向下り (D + A)
ロスから下向き転向360° (D+B)
- 27) ロシアン転向下りは、常に馬端中向き縦向き正面支持から開始とする。
- 28) 終末技は、1 回に限りやり直すことが認められる。ただし、落下減点 (-1.00) と実施減点を伴う。
- 29) ポディウム（演技台）が設置されている場合、（階段を含め）ポディウムから下りた時点で、終末技をやり直す権利は失効となる。
- 30) 終末技は旋回技から実施しなければならない。片足振動技や不十分な旋回技からの倒立は終末技として認定しない。
- 31) 倒立を経過する終末技で移動やひねりが含まれた場合、馬体を越えなくても技の成立した部分まで難度を認定する。

例) DSA 倒立 3 部分移動 1 回ひねり下り (E 難度) で、3 部分移動後 1 回ひねりの途中で中断した場合、DSA 倒立 3 部分移動 (D 難度) まで認定とする。

- 32) 倒立を経過する終末技で、倒立が傾き倒れかけながら咄嗟にひねりを加える捌きは、倒立位に収めておらずコントロールされていないとみなし、1 回ひねりが確認されても難度の格上げは認められず、実施減点も発生する (0.10、0.30、0.50)。
- 33) ショーンとベズゴは立位から（旋回無しで）行くと、2 段階の格下げとなる。
- 34) モギルニー (Ⅲ-70) とベレンキ (Ⅲ-76) は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。
- 35) 難度を格上げするために、倒立位を経過する交差技の前後に追加の動作を加えることはできない。例：I 4 リーニン (I-4) の前にとびを追加しても難度は上らない。

MTC は、旋回および開脚旋回技だけが D 難度以上の価値を与えられるという原則を適用した。

- 36) MTC は、縦向きまたは横向き支持で開始する移動を伴う、伴わないにかかわらず両手を挟んで行うすべてのシュピンドル（1 回ひねり）に対して F 難度と難度表のグループ II #30 を与えるという原則を適用した。

- 37) 新しく追加された技、技名

- ① 両手を挟んで旋回 1 回ひねり（開・閉脚）（ケイハ 1）：F 難度（Ⅱ-30）



- ② 両手を挟んで旋回ひねり（開・閉脚）（ケイハ 2）：C 難度（Ⅱ-27）



- ③ 両手を挟んでシュテクリ A (DSA)（ケイハ 3）：D 難度（Ⅱ）



- ④ 両手を挟んで外向き旋回ひねり（ケイハ 4）：E 難度（Ⅲ）



- ⑤ 両手を挟んで外向き旋回 1 回ひねり（2 回以内の旋回で）（ケイハ 5）F 難度（Ⅱ）



- ⑥ 開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動 1 回ひねり（2 回以内の旋回で）（ウルジカ 2）：E 難度（未定）



- ⑦ 縦向きとび後ろ移動（馬端～馬端）（カルバノフ）：E 難度（Ⅲ-59）



- ⑧ 一腕上向き 270° 転向（横向き～縦向き）（ベルトンチェリ）：C 難度（Ⅱ-69）



2. 演技実施上の確認事項

- 1) 交差技以外の片足振動技においても大きさのない実施は減点となる（0.10、0.30）。
- 2) とび交差技についても、高さの減点は交差技と同様に扱う。とび交差技および交差倒立技において、両脚で馬体を挟んだり、臀部がついた場合は、器械上への落下とする。
- 3) 片足振動技で開始する際の余分な予備振動は 0.30 の減点となる。半振動は認められる。



- 4) 倒立を経過する交差技は振動で実施されるべきであり、腰をまげて倒立位になるような捌きは 0.10 または 0.30、0.50 の減点となる。また、倒立で足を閉じない場合は、0.10 または 0.30 の減点となる。

- 5) 倒立位を経過する技で倒立への上昇局面で足先が下がった場合は、減点の対象となる。
(9-3条2.d)
15° まで・・・－0.10
16° ～30° ……－0.30
31° ～45° ……－0.50
45° を超える・・・－0.50 (不認定)
- 6) 縦向き移動技で移動した後の終末局面で向きが不正確な実施は減点の対象である。
- 7) 縦向き移動技の向きの逸脱や着手位置のずれは旋回 (一部分移動) ごとに減点の対象である。
- 8) フロップ技は一転向、一旋回ごとに減点の対象である。
- 9) 旋回技において馬体に触れる (当たる) 実施は毎回減点となる。(触れる0.10、ぶつかる0.50)
- 10) 旋回もしくは開脚旋回から倒立 (終末技や演技) について
旋回または開脚旋回から倒立を試みる場合、腰のまがりに対する減点はない。しかしながら、力の使用、腕のまがり、腰が下がること、不安定性についての減点はあり得る。一方で、交差からの倒立については腰のまがりの減点を行う。
- 11) 倒立を経過する複合技 (ブスナリ等) での停滞は減点の対象である。
わずかな停滞・・・－0.10
明らかな停滞・・・－0.30
2秒以上の停滞・・・－0.50 (不認定)
- 12) 交差技や片脚振動での大きさ不足の減点を明確化する (採点規則11-3条)

大きさ	減点
肩の高さより上	0.0
肩の高さより下、水平以上	0.1
水平以下	0.3



減点なし



-0.1



-0.3

3. ニュートラル・ディダクション (ND)

- 1) 馬体の3部分を使用しない・・・0.30

□ つり輪

1. 難度認定上の確認事項

- 1) 10cm 厚の着地マットの使用は認められない（高等学校、U-15、U-12 適用規則は除く）。
- 2) すべての静止姿勢は最低2秒保持しなければならない。
- 3) 技は原則として伸腕で実施しなければならない。
- 4) ジョナサンやヤマワキで支持が見えた場合、0.50 の減点となり、難度は不認定となる。わずかな支持の場合、0.10、0.30 の減点を伴い認定される。不認定の場合、選手の意図とは異なるため、「ホンマ支持」と「支持後ろ振り、前に回りながら懸垂」の 2 技に分割して価値を認めることはない。
- 5) 支持後ろ振り、前に回りながら懸垂（I-07：A 難度）は、水平支持や中水平支持から実施しても認定することができる。
- 6) 振動倒立技の要求について
演技中、一つの振動倒立技（2 秒）が要求されカウントする 10 技（ジュニアでは 8 技）に入っていないなければならない。この要求を満たすことができるのは以下の 5 技だけである。
 - * I-81 後方車輪倒立（2 秒） ほん転逆上がり倒立（2 秒）
 - * I-87 前方車輪倒立（2 秒） 後ろ振り上がり倒立（2 秒）
 - * I-92 支持後ろ振り倒立（2 秒）
 - * I-93 ホンマ支持後ろ振り倒立（2 秒）
 - * I-94 伸身ホンマ支持後ろ振り倒立（2 秒）
- 7) 中水平支持は、輪の高さで身体を水平で一直線に保持しなければならない。肩の大半が輪の上端より上にあった場合、水平支持と判定する。
- 8) アザリアンやヤン・ミンヨン（ゆっくりと後方伸腕伸身逆上がり水平支持）は、伸腕かつ伸身姿勢での後転が前提であり、肘のまがりや腰のまがりとは実施減点となる。明らかに反動を利用した場合、グループⅢの技となる。
- 9) ピネダ（伸腕伸身正面水平懸垂経過十字懸垂）、バブサー（伸腕伸身正面水平懸垂経過中水平支持）は伸腕が前提であり肘のまがりとは実施減点となる。極端にまがる実施は難度を認定しない。また、正面水平懸垂（経過）は、正確な姿勢を表現し反動や振動を使わないで実施しなければならない。
- 10) ナカヤマについては、背面水平懸垂姿勢を経過し、ゆっくり捌かなければならない。明確に背面水平懸垂まで下ろさないものは単なる十字懸垂（B 難度）と判定する。また、反動を使うような捌きは D 難度として認定しない。
- 11) 脚前挙十字懸垂から伸腕伸身中水平支持や伸腕伸身十字倒立は、一度腰を伸ばしてから中水平支持や十字倒立に捌くことが前提である。腰をまげたまま肩を前に出す捌きは、屈身で判定する。
- 12) 水平支持（水平支持と開脚水平支持）は各グループで一度ずつ、一演技中 2 回まで価値を認定する（EGⅡとⅢ）。その際、最も難度の高いものから順に認定する。
- 13) 十字懸垂（十字懸垂、脚前挙十字懸垂、脚上挙十字懸垂）は各グループで一度ずつ、一演技中 2 回まで価値を認定する（EGⅡとⅢ）。その際、最も難度の高いものから順に認定する。
「アザリアン～ナカヤマ～前振り上がり脚前挙支持～伸腕伸身力倒立」の判定は
D+不認定（同グループの十字懸垂）+B+不認定（力技 4 技目）
- 14) 9-2 条 9 に関して：「いかなる理由でも難度の認められなかった力静止技からの引き上げ技は、難度が認められない。」とあるが、しかしながら最終終末姿勢の部分については認定することができる。
例）・け上がり十字懸垂（角度不認定）+引き上げて中水平支持（中水平支持で完璧な実施）（Ⅱ-89）
＝この場合、中水平支持（Ⅱ-10）は D 難度で認定することができる。

- 15) 背面懸垂は、十字懸垂などへ引き上げる開始の姿勢としては認められず、十字懸垂（や他の力静止技）の難度を高めることはできない。もし背面懸垂から十字懸垂に引き上げても、単独の難度（B）を得るのみである。
- 16) すべての振動からの力静止技は、肩の位置が最終的な静止位置の高さを超えてはならない。どのような逸脱でも E 審判によって相応の減点がなされる。「輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂」で持ち込む際に 46° 以上の角度の逸脱は難度を認定しない。また意図した技とは異なるため、部分的な難度も与えられない。
- 17) 振動から力静止技に続く技のうち逆方向に戻るものは（たとえば「前振り上がり中水平支持」「前振り上がり十字倒立」など）二つの技とみなす。
- 18) 構成上の減点は 0.30 となる。例えばホンマ支持から脚前拳支持に脚をあげることや開脚前拳支持から脚前拳支持にもどすこと、け上がり支持から脚前拳支持に脚をあげること等である。
（ホンマ支持から振り上げて開脚前拳支持は、構成上の減点にはならない。）
- 19) バランディン 1・3（II-119）は元の採点規則の表記を修正する。新しい文は「懸垂から伸腕で引き上げて中水平支持（2 秒）、または中水平支持経過水平支持（2 秒）」

2. 種目特有の繰り返し

1) グループ II・III の連続について

グループ II や III を連続して 4 回続けることはできず、D 審判によって難度は認定されない。3 連続の後にグループ I の B 難度以上の技が入れば改めて 3 連続が可能である（ただし、け上がり・後方け上がり系、およびその同一枠の技を除く）。この B 難度以上の振動技はカウントされる 10 技内でなければならない。

例 1)	* 後ろ振り上がり中水平支持	III-E		認定
	* 後ろ振り上がり十字懸垂	III-C		認定
	* け上がり脚前拳支持	III-B		認定
	* 伸腕屈身力倒立	II-B		不認定 (EG II/III 4 連続)

例 2)	* 後ろ振り上がり中水平支持	III-E		認定
	* アザリアン	II-D		認定
	* 後ろ振り上がり十字懸垂	III-C		認定
	○ 後ろ振り上がり支持	I-A		認定
	* 伸腕屈身力倒立	II-B		不認定 (EG II/III 4 連続)

例 3)	* 後ろ振り上がり中水平支持	III-E		認定
	* アザリアン	II-D		認定
	* 後ろ振り上がり十字懸垂	III-C		認定
	● 後ろ振り上がり開脚前拳支持	I-B		認定
	* 伸腕屈身力倒立	II-B		認定 (※)

※ 「後ろ振り上がり開脚前拳支持」がカウントされる 10 技に含まれる必要がある。

例 4)	後ろ振り上がり中水平支持	Ⅲ-E		認定
	け上がり脚前拳支持	Ⅲ-B		認定
	十字懸垂	Ⅱ-B		不認定(静止なし)
	伸腕屈身力倒立	Ⅱ-B		不認定(EGⅡ/Ⅲ 4連続)

* 「実施された」グループⅡ・Ⅲの技は全て、カウントする技に入っていようといまいと、この規則に關与する。不完全な実施や繰り返しにより不認定になった場合も含まれる。

2) 終末姿勢が同一の力静止技について

Dスコアの算出にあたり同一番号技の繰り返しは認められないが、つり輪の場合この規則は拡大解釈される。それは、終末姿勢が同一の力静止技は各グループで1技だけ、最大2技の難度が認められるというものである(一方はグループⅡで他方はグループⅢ)。もしも、同一グループかつ終末姿勢が同一の力技を複数実施した場合は、最も難度の高い技のみが認定される。

注) 十字懸垂・脚前挙十字懸垂、脚上挙十字懸垂は全て同一の終末姿勢とし、開脚水平支持・閉脚水平支持においても同一の終末姿勢としてあつかう。

- 例1) 後ろ振り上がり十字懸垂 (Ⅲ・C) ～ ホンマ十字懸垂 (Ⅲ・D)
不認定 認定
- 例2) アザリアン (Ⅱ・D) ～ ホンマ十字懸垂 (Ⅲ・D)
認定 認定
- 例3) け上がり十字懸垂 (Ⅲ・C) ～ ホンマ脚上拳十字懸垂 (Ⅲ・E)
不認定 認定

3) グチヨギー系とリーニン系の繰り返しについて

グチョギー系とリーニン系はそれぞれ最大2回まで認められる。例えば、グチョギーを3回実施した場合、難度の高い2技のみが認定され、D1審判によって減点（ND 0.30）

- 例) 屈身グチョギー (I-D) ～ グチョギー (I-C) ～ 伸身グチョギー (I-E)
認定 不認定 (ND 0.30) 認定

3. 演技実施上の確認事項

- 1) 力静止技において、2秒未満の静止は減点（0.30）、静止無しの減点（0.50）。
- 2) 後方車輪（ほん転逆上がり）倒立経過において、腕が完全に揃っていない捌きや、倒立位を経過していない場合の減点（0.10、0.30）。
- 3) ヤマワキやジョナサンで回転速度が遅い、または大きさが無い場合の減点（0.10、0.30）。
- 4) ヤマワキやジョナサンの回転途中に支持が見られた場合（止まりかけて前ロールをするような捌き）の減点（0.50）。
- 5) 演技開始時や十字懸垂、中水平支持などの後に腕をまげて逆懸垂になる捌きは減点（0.10、0.30、0.50）。
- 6) 力静止技や静止技に持ち込む際の腕のまがりの減点（0.10、0.30、0.50）。
例：振動から中水平支持への持ち込み方や、け上がり十字懸垂の肘のまげ伸ばしを利用した持ち込み方など。
- 7) 力静止技での深すぎる握りは許されない。深すぎる握りとは力技の際、負担を軽減するために手首を巻き付ける実施のことであり、毎回 0.10 の減点となる。正しい握りとは、手指が輪を握るかどうかでなく、手首がまっすぐな捌きである。※輪の（手首がまっすぐで手を開いた）握り方は評価の対象ではない（誤った握りではない）。

- 8) 倒立位で腕がロープに触れる、肘や腰を使って調整などの減点 (0.10、0.30)。
- 9) 技術的に最低限前腕部がケーブルに触れることが必要となる、屈腕による力倒立技に対してのみ、ケーブルに触れたことに対して減点しない (II-25: 屈腕屈身 (開脚) 力倒立 (2 秒)、II-26: 屈腕伸身力倒立 (2 秒))。
- 10) 難度表にない技 (逆懸垂、屈身逆懸垂、背面懸垂姿勢) の 2 秒以上の停滞の減点 (毎回 0.10)
- 11) 輪 (ケーブル) の揺れやゆがみは、1 技毎に 0.10 の減点となる。
- 12) 十字倒立で、頭頂部が輪よりも高いような実施の減点 (0.50)。
- 13) 十字倒立で反った捌きに対する減点 (0.10)。
- 14) 中水平支持や開脚水平支持で、肩が静止していても足先が揺れていたり、全体的にジワジワと動いているような実施では静止は認められず、全く静止していない減点 (0.50) に抵触する。
- 15) 屈腕伸身力倒立で振動を使った場合の減点 (0.10、0.30)。
- 16) 伸腕屈身力倒立で肘がまがった場合、腕のまがりの減点、(0.10、0.30) とロープに触れる減点 (0.30)。
- 17) 先に行われた力静止技が不十分な技術または姿勢により減点された場合、その力静止技からの押し上げ技に対しても最大 0.50 までの同等の減点がなされる。この解釈は、高いポジションまたは技術的に不十分な実施により、それに続く押し上げ技が容易になってしまう状況の場合のみを意図している。
- 18) 難度の認められなかった力静止技からの押し上げ技は、最終終末姿勢については認定することができる。
例: 十字懸垂 (角度不認定) ~ 引き上げて中水平支持・・・中水平支持の単独の難度 (D 難度) は認めることができる。
- 19) 脚上挙支持や脚上挙十字懸垂は、上半身と脚部に開きがあるような捌きは柔軟性にかかる減点の対象となる (0.10、0.30)。脚上挙支持の脚は垂直でなければならない (脚上挙十字懸垂は、腕が水平で脚が垂直)。
- 20) 演技開始の懸垂で正しい姿勢からの逸脱 (肩転位や輪を開いた状態) が見られる場合は、減点の対象とする。
- 21) 押し上げ技や引き上げ技で姿勢の変化に乏しい実施は実施減点の対象となり、不認定となる可能性もある (中水平支持～水平支持)。角度が高い力静止技から続けられた引き上げ技で、最大 0.30 の減点がこの過失に適用される。
- 22) 宙返りや終末技での着地において、安全上の理由により選手は脚を開いて着地をすることができる。その際、十分に踵を揃えられるだけの間隔でつま先を動かすことなく、踵を閉じて完了しなければならない。
脚を開いた着地の減点は下記のとおりである。
 - ・わずかに脚を開いて着地し、つま先を浮かさず踵を閉じる……………減点なし
 - ・一足長以内に脚を開いて着地し、脚を上げて踵を閉じる、または、脚を閉じない……0.10
 - ・一足長を超えて脚を開いて着地し、脚を上げて踵を閉じる、または、脚を閉じない…0.30※その他全ての実施減点 (宙返りの空中局面や着地準備の際の身体の開き) も常に評価の対象となる。

4. ニュートラル・ディダクション (ND)

- 1) 振動倒立技がない・・・0.30
- 2) 2 回を超えたグチョギー系、リーニン系の技・・・0.30 (不認定)

□ 跳 馬

1. 難度および演技実施上の確認事項

- 1) 種目別予選および決勝において、得点の算出方法は第一跳越と第二跳越の平均を得点とする。
- 2) グループⅡの技は第一局面で 1/4 または 1/2 ひねらなければならない。したがって、正面を向いたまま手を前後にずらしただけの着手は、グループⅠの技として判定する。
- 3) 高さ不足（上昇局面のみられない実施）は以下の基準とする。
減点なし = 群を抜く卓越した高さ
小 欠 点 = 浮いたと感じる程度
中 欠 点 = 浮きがみられない
大 欠 点 = 低いと感じる
- 4) 全ての跳越技において、準備局面のみられない実施は減点となる（0.10、0.30）。
- 5) 着地の際の姿勢で、頭や腰の位置が低い実施は減点の対象である。
- 6) 着地一步の踏み出しで、一足長以上は中欠点である。
- 7) 軸ぶれやひねり不足による横方向への一步は、さらなる減点の可能性がある。
- 8) ひねり不足が 90° を超えた場合、一段階下の技の価値を与える。
- 9) 着地が止まっても脚が開いたままやずれている場合は減点の対象である。

10) 新しく追加された技名

① V-574 「ロンダート、1 回ひねり後転とび後方伸身宙返り 2 回ひねり（シライ 3）」

Dスコア 5.4 （NL32）



② III-386 「屈身メリサニディス(ヤン・ウェイ)」

Dスコア 5.6 （NL34）



11) Dスコアの訂正

- ① I-110 「前転とび前方かかえ込み宙返り 3/2 ひねり」「クエルボ1回ひねり(クロレ)」
* Dスコア 4.0→3.6
- ② I-111 「前転とび前方かかえ込み宙返り2回ひねり」「クエルボ 3/2 ひねり(カンバス)」
* Dスコア 4.4→4.0
- ③ II-230 「ツカハラ2回ひねり（バルビエリ）」
* Dスコア 4.0→3.6
- ④ III-342 「ユルチェンコ2回ひねり」
* Dスコア 4.0→3.6

2. 0 点となる実施について (D・E 両審判 0.00)

- 1) 跳馬に着手することなく跳び越えた場合、または跳馬に触れても突き手が見られない場合。
- 2) ロンダート技において、セフティ・カラーを使用しなかった場合。
- 3) 技として判定できないような場合、あるいは跳馬を足で蹴った場合。
- 4) 跳越において補助行為があった場合。
- 5) 最初に足による着地が行われなかった場合。これは、体のどの部分よりも先に少なくとも片足が着地マットに触れなければならないことを意味している。
- 6) 故意に横向きで着地した場合。
- 7) 禁止されている技を実施した場合 (開脚技、第 1 局面での宙返り、踏切前の禁止された技を行う)。
- 8) 種目別予選および決勝において、1 回目と同じ技を 2 回目も行った場合。

3. ニュートラルディダクション (ND)

- 1) ライン減点
- 2) やり直された助走に対する減点
 - ・助走をやり直した場合 ⇒ 1.00 (失敗の助走が跳躍板や器械に触れなかった場合に限る)
 - － 1 跳越を行う場合、1 回のやり直しが認められる。
(3 回目の助走は認められない)
 - － 2 跳越を行う場合、1 回のやり直しが認められる。
(4 回目の助走は認められない)
- 3) 同じグループからの跳越に対する減点
 - ・種目別予選または決勝で同じ技を繰り返す ⇒ D・E 両審判 0.00
 - ・種目別予選または決勝で 2 回目の跳越を同じグループから実施する
⇒ 2 回目の跳越技の決定点から 2.00
- 4) 同じ、または類似した第二局面の技に対する減点
 - ・種目別予選あるいは決勝で 2 回目の跳越を同じ、または類似した第二局面の技で実施する
⇒ 2 回目の跳越技の決定点から 2.00
- 5) 25m を超えた助走 ⇒ 0.50

□ 平行棒

1. 難度認定の確認事項

- 1) ヒーリー系の技は 360° 以上のひねりを必要とする。
単棒横向き倒立からのヒーリーは 450° のひねりが必要であり、3/4 ひねりの技は B 難度（I-50）とみなす。
- 2) 倒立から片腕支持1回ひねり腕支持（I-68）には、単棒倒立からも含まれる。単棒倒立から片腕支持1回ひねり腕支持（I-69）は「B難度以上の単棒倒立になる振動技から」が条件となる。
- 3) マクーツ系の技の前半部分での停滞や停止に対する評価
1 秒未満の停滞（認定 -0.10）
2 秒未満の停滞（認定 -0.30）
2 秒以上の停止（不認定-0.50）
- 4) 後方棒上宙返り単棒縦向き倒立（C難度） ヒーリー系の技につなげた場合 ➤D難度
後方車輪単棒縦向き倒立（C難度） ヒーリー系の技につなげた場合 ➤D難度
(ピアスキー)
車輪ディアミドフ単棒縦向き倒立（D難度） ヒーリー系の技につなげた場合 ➤E難度
棒下宙返り単棒縦向き倒立（D難度） ヒーリー系の技につなげた場合 ➤E難度
(シャルロ)

※あとに続けたヒーリー系の技も難度が一つ格上げとなる。

※開脚になる技（ティップルトやアリカン等）は、単棒倒立になっても難度は上がらない。

- 5) 棒下宙返り倒立で肘がまがっても上昇運動に停滞がなければ難度を認定する。しかし、上昇中に停滞する実施や肩が一度下がるような実施は難度不認定となる。
- 6) 棒下宙返りひねり倒立で倒立の角度が低い実施（45°未満）をした場合、明らかな過失として難度不認定とし、棒下振り出しひねり支持（C 難度）としては判定しない。棒下振り出しひねり支持を実施する場合は、意図を明確に表現しなければならない。
- 7) 開脚抜き倒立技（ティップルト等）で脚がバーにのった場合、難度不認定となる（器械上への落下）。また、開脚支持で明らかに停止する実施や上昇時に足先が一端下がり再び上げた場合も難度不認定となる。
- 8) 懸垂前振り上がり開脚抜き伸身かつ水平位で懸垂：（バブサー：E難度）の後に連続された技は独立した難度を有する。（後方車輪倒立（C）、モイ（C）、ベーレ（D）など）
- 9) 屈身ベーレは、最初の後方宙返りから明確な屈身姿勢を示さなければならない。懸垂から宙返りになる際に膝のまがるものや屈身の不明確な実施（屈身になるのが遅い）は、かかえ込みと判定する。
- 10) 特別な繰り返し
① 同じグループ内で、姿勢の異なる同じ種類の宙返り技を行うことはできない。
例えば
・ かかえ込みモリスエ（I-46）と屈身モリスエ（I-47）
・ かかえ込みベーレ（III-52）と屈身ベーレ（III-53）
・ ギャニオン（III-123）とギャニオン2（III-124）
・ ソーサ（III-47）、懸垂前振り後方かかえ込み（屈身）宙返りひねり腕支持（懸垂）（III-58）、トレス（III-59）、フォーキン（III-65）
② 最大 2 回までの後方車輪倒立技（III-21、22、28、29、35）
・ 後方（背面）車輪（単棒）倒立（III-21）、ピアスキー（III-22）、車輪ディアミドフ（単棒倒立）（III-28）、車輪ディアミドフ（1/4）ひねり（III-29）、車輪ディアミドフ単棒倒立（III-35）

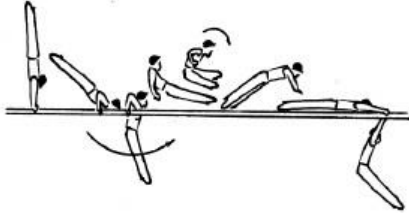
- ③ 最大 2 回までの棒下宙返り（逆上がり）倒立技（Ⅲ-106、107、108、114、119、120、130、131、136）

・ 棒下宙返り（単棒）倒立（Ⅲ-106）、棒下宙返りひねり倒立（Ⅲ-107）、棒下宙返り 1 回ひねり倒立（Ⅲ-108）、棒下宙返り 5/4 ひねり倒立（Ⅲ-114）、シャルロ（Ⅲ-119）、ヤマムロ（Ⅲ-120）、横向き逆上がり倒立 1/4 ひねり倒立（Ⅲ-130）、横向き逆上がり倒立 3/4 ひねり倒立（Ⅲ-131）、横向き後方開脚浮腰回転倒立（Ⅲ-136）

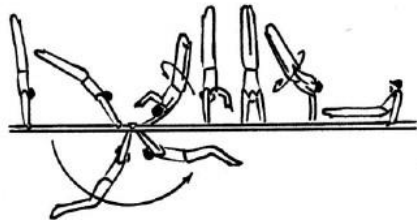
※いずれも難度の高い順にカウントする。

11) 新しく追加された技

- ① 前振り開脚抜き懸垂（バボシュ）：C 難度（Ⅰ-9）



- ② 懸垂前振り片腕支持 3/4 ひねり 単棒倒立経過、軸手を換えて 3/4 ひねり 支持（バウマン）：F 難度（Ⅲ-42）



- ③ 棒下宙返り、かかえ込み姿勢でひねり腕支持（ギャニオン）：C 難度（Ⅲ-123）



- ④ 棒下宙返り、伸身姿勢でひねり腕支持（ギャニオン2）：D 難度（Ⅲ-124）



- ⑤ 前振り上がり開脚抜き懸垂（ムンテアン）：C 難度（Ⅱ-3）



2. 演技実施上の確認事項

- 1) 振動から倒立位を経過する技は、15°未満の角度逸脱であっても減点 (0.10) となる。
- 2) 静止技として難度が認定されるためには 2 秒保持しなくてはならない。
脚前挙支持で静止が 2 秒未満の場合の減点 (0.30)、静止がない場合の減点 (0.50：難度不認定)。
- 3) 支持から腕支持ローリングをした場合の減点 (0.30)。
- 4) すべてのけ上がりにつながる懸垂技は、伸膝で行わなければならない。膝をまげた懸垂姿勢の減点 (0.30)。
- 5) 宙返り技の受ける際の体の開きは、バーの高さで水平位を基準とする。モリスエやベアレは浮きの表現とともに、腕支持になる前に身体や膝をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしที่ไม่充分なものや、膝をまげたまま腕支持になるものは実施減点の対象となる。回転の途中でぶつかるように腕支持になる減点 (0.30、0.50)。かかえ込んだまま腕支持になった場合の減点 (0.30)。モリスエやベアレの高さ不足の減点 (0.10、0.30)。モリスエやベアレでバーを持った瞬間の姿勢不良の減点 (0.10、0.30)。
- 6) モイや後方車輪系の技は、振り下ろす際、体が水平位に達するまで膝をまげてはならない。
 - ・ バーの高さで膝をまげはじめる (減点なし)
 - ・ 振り下ろしてから膝をまげはじめる (0.10)
 - ・ 倒立位から膝をまげはじめる (0.30)
- 7) ベアレ、モイ、車輪系の技で足先がマットに触れた減点 (0.10)、明らかにぶつかった減点 (0.50)。
- 8) ベアレや宙返り系の技の終末局面において、バーを正確に握らない、または遅い握り、上腕部のみで支持しながら前振りになるような捌きに対する減点 (0.30)。
- 9) バブサーで水平位からの逸脱、支持が見えすぎる場合の減点 (0.10、0.30)、身体が水平から 45° を超えて逸脱するか、肩角度が 90° を超えてバーを握った場合の減点 (0.50、不認定)。
- 10) 棒下宙返り倒立系の技は伸腕での実施が前提である。肘がわずかにゆるむものは実施減点となる。肘がまがった場合の減点 (0.10、0.30)。肘が深くまがった場合の減点 (0.50)。
- 11) シャルロやピアスキーで縦向き単棒支持で正対を示さない場合、縦向きの角度逸脱減点もありうる (0.10、0.30)。握り手を前後にずらしたことによるわずかなゆがみは減点の対象とはならない。身体の向きの逸脱は減点の対象となる。過度の逸脱は難度不認定となる。
- 12) 単棒横向き前方浮腰上がり脚前挙支持経過横向き倒立で、足先がバーに触れた、ぶつけた場合の減点 (0.10、0.50)。
- 13) ティップルトで脚がバーにのった場合、器械上への落下となり減点 (1.00)。
- 14) 終末技で着地を止めても着地前に身体を伸ばす局面がみられない減点 (0.10)。
着地で膝をついた実施は (1.00)、マットに触れた場合は (0.30)。
- 15) 前振り上がりから直接、脚前挙支持につなげる捌きは、前振り上がりの大きさ不足による減点 (0.10、0.30) となる。

3. ニュートラルディダクション (ND)

- 1) ウォーミングアップ時間は、個人に対し 50 秒、チームに対し 50 秒×人数分が与えられる。それらにはバーの調整やマグネシウムをぬる時間も含まれる (終了のコールと同時に始めた運動は認められる)。時間オーバーした場合は決定点から 0.30 の減点 (ND) となる。
計時審判のコールはアップ開始の「スタート」、個人の場合はカウントアップ「40 秒」、「50 秒 (終了)」とする。チームの場合はカウントダウン「30 秒前」、「10 秒前」、「終了」とする。運営上可能であればタイマーを設置する。

□ 鉄 棒

1. 難度認定の確認事項

1) 組合せ加点

- ・組合せ加点は下記のような組み合わせに与えられる（すべて逆も可）。

$$\begin{array}{ccc} \text{手放し技} & & \text{手放し技} \\ \text{C、D、E、F、G、H、I} & + & \text{C} \\ \text{例) コバチ} & + & \text{ギンガー} \end{array} = +0.10$$

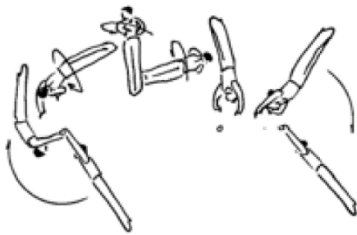
$$\begin{array}{ccc} \text{D、E、F、G、H、I} & + & \text{D、E、F、G、H、I} \\ \text{例) コバチ} & + & \text{コールマン} \end{array} = +0.20$$

- ・大欠点のある場合は組合せ加点が認められない。
- ・組合せ加点を得るためには、それらの技が10技の中に含まれている必要はない。

2) 特別な繰り返し

- ・ひねりを伴う技は握り方の違う同じ技（例：リバルコと後方とび車輪3/2ひねり片大逆手）を行うことはできない。行った場合は、難度の高い順に認められる。
 - ・アドラー系の技は、演技中に最大2回まで実施することができる。この場合難度の高い順に認められる。
- 3) 手放し技は、両手でバーを持ち明確な懸垂局面を示して難度認定となる。片手で持った場合は、最終的に両手で持った時点か、他の技が明確に開始された場合に難度が与えられる。
- 4) 浮腰回転やとび車輪でひねりを伴う技において、水平より高い位置で技を完了しない捌きは難度不認定になる。
- 5) 浮腰回転やひねりを伴う技での停滞、とびひねり技でとびが見られない握り換えは難度を分割する。
- 6) 肩を反転した状態での逆手背面車輪は大逆手車輪（B難度）と判定する。
- 7) 大逆手車輪（B 難度）は、以下のようにバーを越えることで難度を認定することができる。
例) アドラー（C）～大逆手振り上がり（大逆手車輪：B）～大逆手エンドー（C）
リバルコ（D）～大逆手振り上がり（大逆手車輪：B）～大逆手エンドー（C）
- 8) また以下のように、バーを越える前に持ち換えた場合は、大逆手車輪（B 難度）は認定されない。
例) アドラー（C）～大逆手振り上がり逆手持ち換え（難度なし）
リバルコ（D）～大逆手振り上がり逆手持ち換え（難度なし）
- 9) 15-2 条-2/6.a) アドラー系の技は 2 回まで実施できるという条項において以下のように判定する。
例) ①アドラー・・・・・・・・・・3 つ目で不認定
②アドラーひねり倒立・・・・・・・・D 難度（難度順に 2 つ目）
③アドラー1 回ひねり逆手倒立・・・E 難度（難度順に 1 つ目）
例) ①アドラー（落下による不認定）
②アドラー・・・・・・・・・・C 難度（①の復行、難度順に 2 つ目）
③アドラーひねり倒立・・・・・・・・D 難度（難度順に 1 つ目）
- ※アドラー系の技は落下をしても、落下に至るまでの経緯によってはカウントする場合がある。
（技の終末局面が認められた場合や、落下前に懸垂状態があった場合等）
D 審判が技をカウントした場合はその技をやり直すことはできず、アドラー系の技数の制約にも抵触する。
- 10) 大逆手エンドーの成立は、終末局面である倒立位から 45°以内に収まるか、早めに逆手に持ち換えて前方車輪につながるような捌きであれば難度認定される。また、倒立に上がらないで順手に持ち換えて後方車輪に繋がるような実施では不認定となる。
- 11) 伸身で行う技は全経過伸身姿勢を示さなければならず、経過中に屈身やかかえ込み姿勢がみられた場合、低い難度で判定する。後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下りにおいて、後半に膝をまげるような実施は、かかえ込みと判定し D 難度とする。

- 12) 伸身トカチェフは、明らかな腰のまがり (90°) が見えた場合 C 難度(屈身トカチェフ)とする。
- 13) ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断する。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン (B 難度) と判定する。
- 14) 片手懸垂になる技はバーの下を最大 2 回通過することが認められる。
- 15) モズニク等で、懸垂後に後ろ振り倒立または手放し技へ連続出来なかった場合や腕を交差しただけの実施は、ひねらなかった技として判定される。
- 16) リバルコ片手懸垂やツォ・リミン (I - 27) にひねりを加えても難度が上がることはない。
- 17) 前方浮腰回転開脚抜き懸垂 (支持) (III-103) は車輪からでも、懸垂前振りからでもよい。
- 18) ツォ・リミンでひねりが不十分な場合 (最初のひねりで 90° を超える逸脱)、D 審判によって難度は認められず、E 審判によって 0.50 の減点を受けることになる。その際は、前方片手車輪 (B 難度) としても認められない。
- 19) ツォ・リミンは技の完了に際し、逆手でも片逆手でも認定する。
- 20) ひねって片手大逆手になる技は、片大逆手で実施したのと同様・難度である。
- 21) ヤマワキひねりは、難度認定のためにはすべて同一方向にひねり続けなければならない。異なった方向にひねり戻した場合は、D 審判によって技は認定されない。
- 22) 懸垂前振りやシュタルダーからとび1回ひねり大逆手または片大逆手になる技は認められず、技の意図する方向でない事に対し0.50の減点となる。
- 23) シュタルダーから1/2ひねる技は、手を横にずらしてからひねるとシュタルダー (B) とその後のひねりを分割して認定する。
- 24) 後方とび車輪 1 回ひねり (クースト) は明らかなとびを示さなければならない。明らかなとびがない場合、技は認められない。
- 25) 順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立 (ケステ) の最終局面で足を抜いたのち、即座にシュタルダーに持ち込む場合、ケステのC難度は認めらず、シュタルダーのB難度は認定される。
- 26) 新しく追加された技
 - ① 伸身コバチ2回ひねり (ミヤチ) : I 難度 (II - 96)

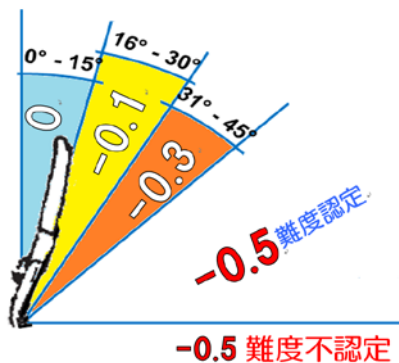


- ② ゲイロード1回ひねり (コーディノフ) : G 難度 (II - 66)



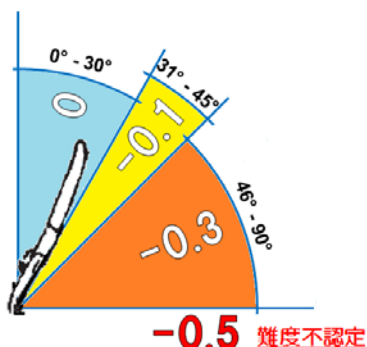
2. 演技実施上の確認事項

- 1) 車輪での単純な横への手のずらし（片手も含め）は実施減点となる（0.10）。
- 2) ひねりを伴う技はひねり終わってバーを持った時の角度で判断をする。
- 3) 後方とび車輪1回ひねり（クースト）で片手ずつ握るような実施は減点となる（0.10、0.30）。
- 4) 手放し技では、バーを握る前に身体をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点となる。
- 5) 浮腰回転ひねり系の技において、ひねりの前に倒立で停滞するような捌きは減点であり、その上分割した難度認定の可能性がある。片大逆手になる技で高い位置でバーを握ってもひねりが完了していない実施は減点となる。
- 6) 手放し技や終末技の前の車輪での膝まがりは実施減点となる。（0.30、0.50）
- 7) 手放し技や終末技の前の車輪の倒立位からの外れに対する減点はない。
- 8) ヤマワキ（Ⅱ - 4）は、伸身で身体が垂直にバーを越えなければならない。バーを越える際の過度の腰のまがりや不完全な実施は減点の対象となる。
- 9) モズニク等の1/2ひねりを伴う手放し技は、持つまでに90°以上ひねらなければならない。不十分なひねりに対しては0.10、0.30、0.50の減点となる。
- 10) 倒立へ上げる途中での脚の下がり、減点の対象となる（9-3条2.d）。
 - 15° まで・・・－0.10
 - 16° ～30° ……－0.30
 - 31° ～45° ……－0.50
 - 45° を超える・・・－0.50（不認定）
- 11) 無価値な振れ戻り（－0.30）
 - ・ け上がり倒立や後ろ振り上がり倒立－後方車輪、後方浮支持回転倒立、シュタルダー等
 - ・ 懸垂後ろ振り－とび順手持ち換え前振り
 - ・ 後ろ振り上がり倒立とび順手持ち換え－後方車輪、後方浮支持回転倒立、シュタルダー等
 - ※倒立位から外れた角度も評価の対象となる
- 12) 振動倒立（経過）技について。



- ① 0°～15°……減点なし
- ② 16°～30°……－0.10
- ③ 31°～45°……－0.30
- ④ 46°～90°……－0.50
- ⑤ 91°以下 ……－0.50（難度不認定）

- 13) ひねりから（片）大逆手になる技は次の角度逸脱の減点を受ける。



- 0°～30°……減点なし
- 31°～45°……－0.10
- 46°～90°……－0.30
- 91°以下 ……－0.50（難度不認定）

- 14) アドラー（1 回）ひねり倒立で逆方向へ戻った場合は、技が意図する方向へ続かなかったと判断し、0.50 の減点を受ける。しかし、角度が満たされていれば難度は認定される。
- 15) 宙返りを伴いバーを越える手放し技は車輪技に続けなければならない（バーを越える）。続かなかった場合は 0.30 の減点となる。他の手放し技に続けた場合は対象外である。
- 16) エンドー、シュタルダー、ワイラーの開始局面で、倒立位からの逸脱は減点対象となる（0.10、0.30、0.50）。一方、アドラー系の技については開始局面で倒立位から行う必要はない。
- 17) 順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立（ケステ）の最終局面で足を抜いたのち、即座にシュタルダーに持ち込む場合、倒立に収めなくても減点にはならない。ただし、技の捌き次第による技術欠点、姿勢欠点は相応に減点される。
- 18) 後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂（Ⅲ-81）は、後半の後ろ振り出しの局面でバーを越える時点では脚上挙支持の体勢であり腕と上半身の角度が 45 度を超えて開いていることを求める。それに満たない場合、減点対象とする（わずかに不足：0.10、不足：0.30）。バーを越えてから振り出された場合は 0.50 の減点となる。バーに身体が触れてからの実施は A 難度で認定とする（国内対応）。



減点無し



0.10 減点



0.30 減点



0.50 減点（A 難度）

3. その他

- 1) 演技中のプロテクターの破損について、プロテクターがはっきりと切れ、落下や中断につながった場合、選手は減点なしで演技全体をやり直すことができる。その際は審判長の許可を得て演技はローテーションの最後に行う。元々最終演技者であった場合は審判長の裁量で許された時間の後に演技を行う。選手が演技やり直しの許可を得るためには、ただちに破損したプロテクターを D1 審判に見せなければならない。

2. タイ・ブレイクについて

下記は 2019 年 FIG 競技規則を抜粋した内容である。競技会における同点の扱いについては競技会ごとの申し合わせ事項であり、参考としてこの一部または全部を準用・適用するのも主催団体の裁量であるが、必ず競技会前に確認しておく事が望ましい。

2019 年版 体操競技 タイ・ブレイク規則

タイ・ブレイク規則（オリンピック、世界選手権および FIG 公認の全ての大会に有効）
全ての予選・決勝競技においていかなる場合も、同点の場合は下記の通り順位が決定される

第 1 条 個人総合の予選・決勝競技

◇個人総合競技において同点の場合は、下記基準に準じ順位が決定される。

1. 競技で獲得した得点の内、男子では高い方から 5 種目、女子では高い方から 3 種目のスコアの合計が高い方を上位とする。
※それでも同点の場合、種目数を減らし、順次決定する。
2. 依然として同点の場合、全種目の E スコアの合計が最も高い選手を上位とする。
3. 依然として同点の場合、全種目の D スコアの合計が最も高い選手を上位とする。
それでも同点の場合、これらの選手を同順位とする。

第 2 条 種目別の予選・決勝競技

◇種目別競技において同点の場合は、下記基準に準じ順位が決定される（跳馬は除く）。

1. E スコアが高い選手を上位とする。
2. 依然として同点の場合、D スコアが高い選手を上位とする。
3. 依然として同点の場合、これらの選手を同順位とする。

◇種目別跳馬の競技で同点の場合は、下記基準に準じ順位が決定される。

1. 二本の跳越の得点の合計が高い方の選手を上位とする。
2. 依然として同点の場合、どちらかの跳越で最も高い E スコアを有する選手を上位とする。
3. 依然として同点の場合、どちらかの跳越で最も高い D スコアを有する選手を上位とする。
それでも同点の場合、同順位とする。

第 3 条 団体総合の予選・決勝競技

◇団体総合の競技で同点の場合は、下記基準に準じ順位が決定される。

1. 獲得したチーム得点の内、男子では高い方から 5 種目、女子では高い方から 3 種目のスコアの合計が高い方のチームを上位とする。
※それでも同点の場合、種目数を減らし、順次決定する。

なお同点の場合は、これらのチームを同順位とする。

3. 2019 年度内規

◆ 本規則は、本情報が発行した日より適用とする。

□ ケガや出血等での対処

競技中に落下等の原因によりケガや出血等が見られた場合、状況により審判長、医師らの判断により演技の続行または中止を決定する場合がある。

□ 次の項目は以下に示す競技会以外の大会で適用する。

- ・第 73 回全日本体操競技選手権大会（個人総合選手権、種目別選手権、団体選手権）
- ・スーパーファイナル
- ・第 58 回 NHK 杯体操
- ・2019 全日本ジュニア体操競技選手権大会（1 部）
- ・第 73 回全日本学生体操競技選手権大会
- ・第 52 回全日本シニア・マスターズ体操競技選手権大会（1 部・シニアの部）

1) ① 終末技グループの要求難度について

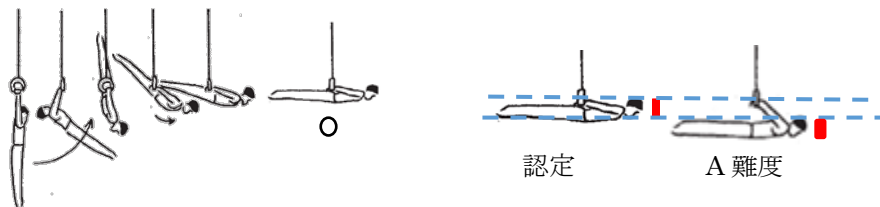
- ・A 難度の終末技・・・ +0.10
- ・B 難度の終末技・・・ +0.20

② 下記の宙返り下りは A 難度とする

- ・つり輪、平行棒、鉄棒の前方・後方のかかえ込み宙返り下り

2) つり輪

- ・ゆっくりと伸腕伸身後転背面懸垂（2 秒）：C 難度（条件：輪のひとつ下の位置での実施）



適用大会：U-15、U-12、全日本ジュニア選手権 2 部、その他中学生以下を対象とする競技会。

□ マナー・モラルについて

採点規則に記載されていない競技会における演技中や演技の前後、競技場内での行動や振る舞いについて、前号から引き続き踏襲し、以下の内容を守っていただきますようお願い申し上げます。

① 着地の際のガッツポーズ

演技の終了を示すポーズと礼をするまで演技の一部です。着地直後、演技の終了を示すポーズを示す前にガッツポーズをとることは控えてください。

② 平行棒での事前調整

跳馬終了後、種目移動前の事前の準備や演技後での器械の調整は 3 名までと致します。また、選手が着地のポーズをとっている最中に次の選手やコーチがマット上に上がることのないようにお願いします。他の種目についても同様とします。

③ マグネシウムや霧吹き、調整器具（ドライバー等）の使用方法

準備の際、マグネシウムをばら撒くように使いマットを白く汚したり、霧吹きや雑巾を投げるなど乱雑に扱うシーンが見受けられます。また、手に大量にマグネシウムを付けた後、叩いたり、マット上で擦り落とす光景も見られます。器械器具や消耗品を問わず、道具の取り扱いには注意を払うようにお願いします。

平行棒では、霧吹きや雑巾をマット上に置いたまま、演技をすることは避けて下さい。

鉄棒において、ワイヤー調節のためのドライバー等がゆかの上に乱雑に置かれている場合があります。演技前に片付けるか、所定の場所に置くようにして下さい。

④ ローテーション時の移動、整列

種目移動は、出来るだけ速やかをお願いします。整列は全種目とも D 審判席の前をお願いします。また、整列直前での器械やプロテクターの調整は控え、他種目で整列している選手を待たせないようにして下さい。

⑤ 採点間や待機時（ウォームアップ時以外）のマット上での練習

特別に許可された大会を除き、マットや跳馬の助走路での柔軟や倒立は控えてください。

⑥ 頭髪や服装、タトゥー

国際大会でタトゥーを入れている他国の選手が見受けられます。文化・風習の違いはありますが、日本においては禁止と致します。また、多くの方が不快に感じる奇抜な頭髪や服の着こなしなどは避けてください。体操競技は美を競うスポーツです。アピールは美しい演技で行って下さい。

⑦ 携帯機器の使用

携帯機器をアリーナ内で使用することは禁止されています。競技中は使用を避けて下さい。競技会の様子や成績などについて、SNS 等による情報発信は不特定多数が見る場への投稿であることを十分に理解し、「著作権」や「肖像権」も慮り責任をもって対応をして下さい。取り扱いには十分ご配慮願います。近年の簡易な通信伝達手段の普及により、様々な情報が瞬く間に伝播されています。大変便利な反面、真偽が判らない情報も制限なく発信されており、選手に関することや発信元が不明なルールに関することなども見受けられます。そのような情報には惑わされることないようにするとともに発信源にならないようご注意ください。

※ その他、選手・コーチ・審判員は、競技会場内外における自身の行動にもご注意いただき、マナーアップへのご協力をお願い致します。